

M月:原作
EMUTSUKI

朝風:イラスト
ASANAGI



破滅 願望

天才美少女魔術師が
自分から犯されに行く話

Fatalpulse × HoneyCum NOVELs

天才美少女魔術師が自分から犯されに行く話

破滅願望

原作

M月

EMUTSUKI

イラスト

朝凪

ASANAGI

登場人物紹介

C H A R A C T E R S



セラ(18)
身長163cm
B94 W57 H95

リア御付きの専属侍女。
幼いころからリアの世話をしており、リアとその両親から多大な信頼を得ている。
常に冷静で、何事もそつなくこなす万能メイドだが、時折、主であるリアをからかったり皮肉を言うなどの年相応な一面も見せる。
リアとその両親に対して絶対の忠誠を誓っており、物事の判断は総てリアを基準に考えて行動しているが…



リア・アズライト(15)
身長149cm
B97 W62 H88

本作の主人公。王城魔術院所属。魔術において天才的な才能を持ち合わせており、若くしてその実力で王城魔術師の席を勝ち取った。しかし本人には地位への執着も向上心もなく、個人的な魔術の研究に専念し、両親の名を汚さないように可もなく不可もなくといった働きに留めている。

些細なきっかけから内なる歪んだ性癖が開花し、下衆な男から無理やり犯されることに至上の悦びを感じるマゾに目覚める。

リア・アズライト 幼少期(10)



セレス・アズライト(32)

身長162cm

B122 W63 H98

リアの母親。王城魔術院所属。

おっとり穏やかな良妻賢母。俗世にまるで興味が無いユピテルやリアとは違い、社交性が高く、あらゆる方面への繋がりを持つ。

魔術の実力も高くかつては優秀な魔術研究者であったが、娘が出来てからは一歩距離を置き夫のユピテル

の補佐に専念している。

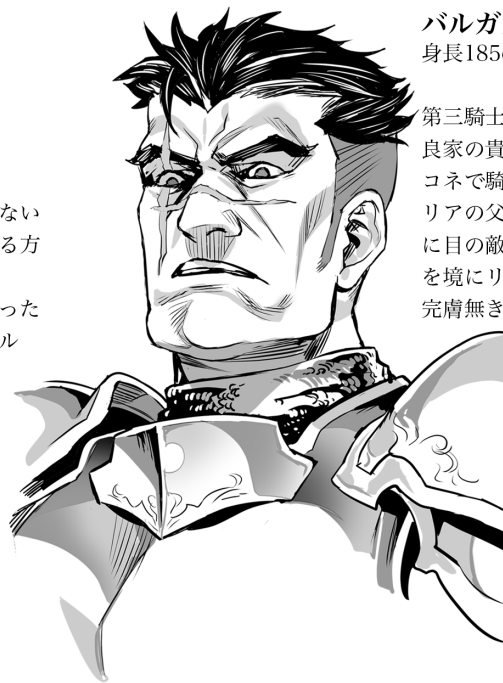
自分以上の才能を秘

めているリアには

非常に期待して

おり、溺愛

している。



バルガス・オルフェゴール(42)

身長185cm

第三騎士団団長。

良家の貴族の出であり、主に家名とコネで騎士団長まで昇り詰めた。

リアの父親であるユピテルを一方向的に目の敵にしているが、とある事件を境にリアにも執着することとなる。完膚無きまでの男尊女卑主義者であ

り、女は身分にかかわらず全員見下している。

能力主義者である、とは本人の談だが、正当に評価するのは自身の実力未満である場合のみであり、自分より優れた人間には敵意を向ける。

ユピテル・アズライト(41)

身長179cm

リアの父親。王城魔術院所属。

国王の招きで国外より招かれた外様の魔術師。大陸一の魔術師として恐れられた存在であったが、家族を得てからは良き父親となるべく模範的な研究者となった。

優秀とはいえ元はよそ者ゆえに、他の古参魔術師や貴族からは敵意向けられているが、本人はさほど気にしていない。

娘の高い才能には喜んでいるものの、それよりも、健康かつ幸せであって欲すればそれで良いと考えている。



目次

C O N T E N T S

◆ 第九話	◆ 第八話	◆ 第七話	◆ 第六話	◆ 第五話	◆ 第四話	◆ 第三話	◆ 第二話	◆ 第一話	◆ 第〇話
ご主人さま	計画	過去	雌豚	絶頂	上下関係	敗北	取り調べ	覗き見	プロローグ
203	191	165	135	107	087	061	031	013	001

◆ 第十八話	◆ 第十七話	◆ 第十六話	◆ 第十五話	◆ 第十四話	◆ 第十三話	◆ 第十二話	◆ 第十一話	◆ 第十話
エピローグ	王	ごほうび	就任	飴と鞭	命令	お姉さま	男と女	再戦
383	367	343	325	311	297	280	257	231



第〇話

C H A P T E R 0

プロローグ



破滅願望

-天才美少女魔術師が自分から犯されに行く話-

「——眩しい」

生まれて初めて城の外に出た私が最初に発した言葉は、そんな他愛もない一言だった。

私の両親は共に国を代表する、大陸でも名のしれた王城魔術師。

その娘である私——リア・アズライト——は、物心ついたときからひたすら魔術の研鑽を積んできた。

産まれたときから城内の魔術院で過ごし、ほとんど城の外に出ることもなかった。

外の世界に一切の興味がなかったし、目的もなかったからだ。

魔術が生きがい——というわけではない。

ただ、親に指示されて学んでいるだけ。辛くはないが、楽しくもない。

それに疑問を感じたこともなかった。

魔術師の娘として生まれた私はそれが使命なのだと考えていたし、幸いにして才能はあったようなのだ。

およそ半年前、15歳の誕生日を迎えたばかりの頃。公開されている魔術の全てを修めきった私に、父親はこう言った。

「流石私の娘だ。他に類を見ないほどの天才だ」

母親は言った。

「これからは、好きなように魔術を研究してその才能を生かしなさい」

私は困った。

好きなように——などと言われても、私に好きなものなんて、一切なかったのだから。

まあそれでも。

両親が、周りの人間が、私に何を期待しているか理解できる程度には分別はある。

だから好きなように——という難解なそれを言葉通りに受け取らず、両親が喜びそうなものを研究していいこうと。

あのとき確かに私はそう思ったのだ。

だが。

そう決意してからほんの数週間で、そんなくだらない考えは消え去った。

切っ掛けは、一冊の本に出合ったあの日。

——その日、私はいつものように日課として朝から王宮魔術院の図書館で適当に本を漁っていた。

「……………」

ある程度は読み切っているはずの書棚に、見知らぬ装丁の本が紛れていることに気が付いた。

豪華な装丁の魔導の稀覯本がならんだその本棚に似つかわしくない、貧民街で出回っているような、

カバ―もなく紙を紐で止めただけの雑な紙束：

興味本位でその本を手に取り広げた私は、初めて見る類の本であるにも関わらずそれがなんなのかをすぐに理解し落胆した。

「……………」

ああ、官能小説か、と。

本来王城の図書室にあるはずのない本だし、そもそも数日前まではこんな本無かったはずだ。

なぜこんな本が紛れ込んでいるんだろう——若干不思議に思いはしたものの、原因を追究することに然程意味はない。

魔術しか学んでこなかった私でも、さすがに最低限の知識は身につけている。

そう、記憶が確かなら、これは底辺と呼ばれる人種が好む内容のはずだ。

子を身籠るために必要なこと、性行為。

低俗な人間——主にスラム街なる掃き溜めに生息していると聞く——はただの繁殖行為であるそれに尋常ではない興味を抱き、爛れた生活を送っているという。

下らない。そう一言で切って捨て、魔術の研究に戻るはずだった。

これまでの私だったら、そうしたはずだ。

しかし目標としていた魔術を全て学んだ私は、次に目

指す先が明確に決まっていなかった。
要するに暇だったのだ。

だから——低俗な人間が好む本というものを、見てやろうと。

そんな見下し半分の暇つぶしに手を伸ばしてしまったのは、仕方のないことだったと思う。

毎日の定位置となつている壁際の席に座り、読み始めて一刻といったところだろうか。

私の体温は、かつてないほど上昇していた。

「……ここ、こんな、卑猥な……」

卑猥なものである、という知識だけはあつた。

だがそこに書かれていた内容は、私の想像を遙かに超えるものだった。

単語の一つ一つは私も知っているものばかり。

中にはよくわからない単語も含まれていたが、大半は理解できる言葉だった。

性器、性交、凌辱、例えばそんな言葉の一つ一つであれば私は微塵も動揺することはない。

ただの言葉で何を狼狽える必要があるのか。

——しかし。

それらの単語をつなぎ合わせることで、ここまで卑俗な、馬鹿げた内容になるのかと私は驚愕する。

下らない、下らない、下らない——

私にあるまじき動揺だった。しかし読むのをやめられない。

そうしていつしか無意識に、私の呼吸は湿っぽくなつていく。

「……はあ……は……」

鼓動が早い。

本の中では主人公である魔術師の女の子が中年の男に嬲られている。

しかも、嫌悪するはずの、いや嫌悪するべき主人公は、初めて味わう快感とやたらに翻弄され、喘いでいる。

はしたなく。声に出すどころか、文字として脳内で認識することすら汚らわしいような嬌声をあげて、悦んでいる。

「……………」

流石低俗な人間が好むだけあって、馬鹿馬鹿しい内容だ。

実際に凌辱される女性がこんな声を出すはずがない。悦ぶはずがない。

そう頭で馬鹿にしつつも、本当にそれほど気持ちいいのだろうかという私らしくもない馬鹿な興味を消しきれない。

「……………はっ……………はっ……………」

呼吸が荒くなっていることにも気づかずに、私の腕が、手が、指が――

小刻みに震えながら、自身の性器へと伸びていく。

駄目だ、こんな本を真に受けていたら、私まで低俗な人間に成り下がってしまう。

今すぐ本を読むのをやめて、いつものように魔術の研

究に戻らなければ。

そうは思うのに、それが正しいとも思うのに、指が止まらない。

私の意思に反して、微かに震えながらも目的のそれと少しずつ距離を縮めていく。

いや。

違う、この本が馬鹿馬鹿しいと鼻で笑って切り捨てられる内容であると証明するために、触れるのだ。

理論だけではただの机上の空論だ。それを実践して初めて、知識に、そして自身の言葉に重み加わる。

これまで魔術を学んできた経験からとつくにわかっていたことではないか。

そう、ただ言葉で下らないと否定するのではなく、自身で確かめてみて、その上で否定するのだ。

だからこれは私が下賤な人間になったわけでも下賤な行為に興味を持つてしまったわけでもなく単なる知識に説得力を持たせるための必要な検証――

「……………んひっ……………!?!」

瞬間、ごちゃごちゃと考えていた思考が霧散する。下着の上から軽く触れただけなのに、声が出た。

なんだ、今の間抜けな声は。

これまで、自身の身体から発せられる感覚で声が勝手に出たことなんてない。

魔術の実践では痛みがつきものだが、これまでに経験した最大の痛みを味わったときでさえも、私は声どころか眉ひとつ動かさなかったと記憶している。

痛いことは痛い。だけど、それだけだ。他の人のように、痛いときに声を出す必要性なんてなかった。

それが。そつと一撫でしただけで、無意識に声をあげてしまったのだ。

「……………ふ……………」

今度は我慢しようと思意識した。

けど駄目だ。私の下半身から、耐えがたい痺れが襲ってきて、どうしても声が抑えられない。

「……………なんなの、……………これっ……………」

歯を食いしばって、眉を寄せながらも手が止まらない。

いや、これは必要な検証なのだ——そんな馬鹿げた自問自答を私は止めることができず、延々と繰り返した。

優秀であるということとは、同時に敵をつくるということでもある。

気味の悪いくらいに静かな子、愛想が無い、暗い、冷たい、不気味——

そんな陰口を叩かれ続けていたことを私は知っている。

だが、それがどうした。

自分よりもレベルの低い人間の、ただの妬み。

そもそも。

私は周りとは比べて感情があまり豊かではないことは確かに自覚していたが、それを欠点だと感じたことなどはな

い。

魔術を……というより全ての物事において、些細なこととで一喜一憂し、笑い、怒り、泣いて——そんな人間の方が、劣っているのだとすら思う。

ある日、同年代である貴族の女の子と会話したことがある。

やれ異性がどうか、お洒落がどうか、恋の素晴らしさだとか、付き合っている男性との初体験だとか——延々と、そんな話ばかり。

流石に口には出さなかったが、辟易したものだ。

そしてその時私は理解した。

やはり周りの人間は低レベルな人間が多い。私は運よく秀でることのできた人間なのだ。

気味が悪いくらいに静か？ 暗い？
違う。私のこれは冷静というのだ。

異性、恋愛、性行為——

下らないものにばかり興味を持つ者たちと私は、ハッキリと優劣がある。

そう、確信した。

「はひーっ……………ひっ……………ふう……………んふううっ……………」

どのくらい時間が経ったか、わからない。私にわかるのは、長い間、猿のように自分の股間を弄繰り回しているという事実のみ。

とつぜん、私の鎖骨あたりにピチャツと冷たい感触が響き、一瞬驚きで身体が震えた。

「……………あ……………？」

どうやら、半開きになっていた私の口から、涎が零れ落ちたらしい。

醜態。

本来だったら自分で自分を殴りたくなくなるくらいの無様さだ。



なのに、なぜか。

私を驚かせたものが涎だと認識した次の瞬間には、中指は先ほどまでの動きを再開していた。

涎を拭うこともせず。自身を叱責することもなく。

「んはあ……………つはーッ……………んくう……………」

いつの間にか私の下着はまるで小水を漏らしたかのようになり濡れ、透けた生地が私の性器をクッキリとかたどっている。

瞬間意識が周囲に意識が向いた。自分の粗い吐息だけが静かな書庫に響いている。

書庫の鍵は当然閉めていなかった…

こんな事をするとは考えてすらいなかったのだ。

こんな早い時間から書庫にくる人間に出会った事はほとんどない。

だが、誰かに見られていた可能性はあったのだ。

ゾク、ゾク……………!!

背筋を駆け巡る妖しい感覚が心地良い。

指から延々と送られてくる痺れによって、性器がひく

ひくと震えているのが自覚できる。

こんな姿を誰かに目撃されたら、私の地位は終わってしまう。両親にも迷惑が掛かる。

でも、指は止まらない。

つーつと、涎が徐々に下へと伝ってきいてた。

でも、拭かない。

仕方ないじゃないか、私の両手は塞がっているのだから。左手で本を抑えながらも視線は淫らな記述を追っていく。

本の中の主人公は、乞食と呼ばれる薄汚い人間に性器を舐められて、信じられないくらいに淫らに喘いでいる。

乳首がピリピリする。ふと視線を胸に向ければ、胸には下着をつけていないこともあつてか、大きな突起が2つ、その存在を主張していた。

自分の冷静さに誇りを持つていたはずの私が。

「あはーっ……………あう……………んあ、くううん……………っ！」

全身のほんの1%にも満たない、小さな豆のような部位を下着の上から指でくくるくと捏ね回しているだけで、

無様に声を抑えられずにいる。

私の身体は今、右手の中指が支配してしまっている。

この指がもたらす快感に逆らえないのだ。

くりくりと指が動く度に、身体がピクピクと震える。

そして。

夢中になつて貪つていたその快感が、気付けば一段と深くなつていく。

「ああああ………なに、………つんあ………ッこれ、んなのおつ………!!」

本の主人公がイク、イクと叫んでいる。

イクとはどういう意味の言葉だろうか。

しかしそれを気にする暇もなく、身体の快感がどうしようもなくなつていく。

わけがわからないまま流されていると、ついにその感覚がはじけ飛んだ。

「んはあああああつ………!!」

思わず天井を見上げて、足を延ばして、自分の指をギョツと挟みながら私は硬直した。

弄っていた股間から脳髓まで、甘い電流が私の神経を焼いたかのような刺激。

「……………!!」

その感覚の頂点で、息が止まる。

初めて味わうその感覚に混乱していると、やがてはあつと勢いよく吐息が零れ、次いで全身がピクピクと痙攣しだす。

「はあつ!! はあつ!! はあつ!!」

全力疾走した直後かのように息を荒げる私は、疲労で机に上半身を突っ伏しながら、未知の感覚の余韻を楽しんでいた。

——それが私の初めての自慰で。

それから半年ほど、私は狂ったように自分を慰め続け

た。

いや、慰めるなんて表現は正しくないだろう。

苛めたのだ。自分の身体を、徹底的に苛め抜いた。

初めての自慰の一月後にはクリトリスを激しく舐りながら空いた手で膣内に指をいれていたし、その三か月後にはなんと張り型で自分の処女を奪ってしまった。

私が見下していた低レベルな同年代たちでもそこまで馬鹿なことはしていないだろう。

だが貞操観念や自制の意思よりも、興味が勝ってしまったのだ。

本の女の子を自分と重ねながら、たくましい男に力づくで組み敷かれ尊厳もなく種付けされるのを想像して張り型を挿入したときは、痛みよりも興奮の方が大きかった。

何度も自慰をする内に、そんな風に凌辱されることを想像して弄ると快感が跳ね上がることを、いつしか私は理解していたのだ。

そして。

超えてはならない一線の先に興味を抑えられなくなるまで、時間はかからなかった。

——犯されたい。



第一話

C H A P T E R I

覗き見



破滅願望

-天才美少女魔術師が自分から犯されに行く話-

ある日、私は城内で一番大きい訓練場を訪れていた。

魔術の実技訓練としても専用の訓練場に次いでよく使用している場所だが、今回は違う。

大訓練場ほど大きい訓練場が他にないため、武術と魔術、それぞれ利用できる日にちが定められているのだ。

武の日（と呼ばれている）では魔術師がこの場で訓練することはできず、逆（魔の日）もまた然りだ。

そして、今日は武の日である。

当然、目の前では、王城仕えの精鋭の騎士たち500人あまりが気合を込めた発声をしながら剣を振り回している。

室内は汗の臭いが充満し、中庭ほどの広さのある大訓練場の天井には男達の熱気で雲がかかり豪華な天井の装飾を覗う事は出来ない。

普段であれば、間違いなく近寄らない。

どう考えても不快でしかない臭いを嗅いでいるのに、私の胸は微かに高鳴っていた。

私は今、夜な夜な自分を慰めている。

犯されたいという願望を自覚してしまつてから、毎日だ。

その思いは日に日に強くなつていった。

…はあつ…このすえた汗の匂い…いい匂い…

色が着いていそうな濃厚な空気を胸いっぱい深呼吸し、私は身体を震わせた。

「貴様、ここで何をしている!!」

突如、誰かの大声が私を妄想から引き戻す。

…いや。誰か、というのは正しくなかった。

私は声の主が誰であるか、わかつている。

視線を向ければ、そこには、私を強く睨む大柄な男がいた。

第三騎士団長、バルガス・オルフェゴール。

典型的な男尊女卑主義者であり、魔術師を嫌う騎士連中の内でも特に魔術師を酷く嫌っている男だ。

「……突然、なんででしょうか」

「ここは訓練場だ。薄汚い魔術師、ましてやお前のような女子供が入ってよい場所ではない。即刻立ち去れ」

重ねて言うが、今日は武の日というだけで、日によっては魔術師も利用する場所である。

「……随分な物言いですね。武の日といえど、見学であれば魔術師の入室も特に禁じられてはいないはずですが」

「ふん、関係ないな。どうせよからぬ事でも企んでいるに決まっている。団長である私の命令だ、失せろ」

男は刀の傷跡が刻まれた眉間に皺を寄せながら、ギロリと私を睨んだ。

年齢40は超えるであろう大の大人が、たかが15の小娘に大人げないにも程がある。

「……はあ。父を嫌っているのは知っていますが、私に当たられても困ります。……ああ、それとも、以前私に負けたことをまだ根に持っているとかでしょうか？」

瞬間、バルガスの目が大きく開いた。

実際、こいつが魔術師を嫌っているのは周知のことなのだが、ここまで積極的に絡んでくるのは父と私が相手のときだけだ。

……いや、といつても、元々こいつは私のことをほぼ無視していた。

こいつからすれば仇敵とも言える父の娘とはいえ、女子供なんて相手にするには値しないと思っていたんだろう。

だが、過去に王城内で開かれた闘技大会。

そこで私は、父に散々嫌がらせをしていたこの男に対し鬱憤を晴らすかのごとく完封勝利を収めた。

しかも、初級魔法しか使わないという舐めきった縛りをした上で。

無詠唱で魔法を唱え続け、触れるどころか近寄ることさえさせずにノックアウトしたのだ。

そのあまりの手ごたえの無さに、こいつが魔術師のことを嫌っているのは自分が勝てないから———というのか、以前にも似たようなことがあったのではないかと睨んでいる。



ともかくその日以来、この男が目の敵にする人間がめでたく一人増えたというわけだ。

「貴様あ……!!」

額に青筋を浮かべて微かに震えるバルガス。

血管が切れて死ぬんじゃないかと思ってしまうほど目に見えて怒りに打ち震えている。

「……あら、失礼しました。お祭りのような催しで騎士団長様が本気を出すわけがありませんでしたね？」

「それ以上口を開いてみる……即刻叩き斬ってくれる……!!」

私のフォローという名の煽りに、バルガスは腰に掲げた剣の柄に手をかけた。

この男本気か、と思わなくもないが、多分本気なんだろう。

この程度のやり取りで我を忘れる程怒り狂うなんて、

私としてはその方が恥ずかしいと思うのだが。

「……怖いですね。斬られる前に、退散することにしませう」

あまりのバルガスの無様さに嘔み潰していた失笑が口元を歪めてしまう。

見られないように急いで踵を返したが、ひよつとしたら嘲笑しているのを見られていたかもしれない。

バルガスから見たら彼を笑いにわざわざ訓練場に顔を出した性悪女ではないか……

……まあ、この男の沸点の低さはともかく。

今まで武の日に立ち寄ったことなんてなかった私が突然見学に来ていたのだ、訝しむのもわからなくはない。

実際、ここに足を運んだのはロクな理由じゃない。

男臭いこの空間に来て、ここにいた全員から無理やり襲われることを妄想して楽しんでいたので。

何十本もの腕が私の身体に伸びてきて、ローブが破かれ……

と、ここにいる全員だと、バルガスまで対象に入って

しまう。

さすがにそれは嫌悪感の方が強い。

(……あ、でも、あの本でも……)

私が図書室で見つけた官能小説。

もう何回読み返したかわからないあの物語には、嫌っている男に犯されるというシチュエーションがあった。

……いや、あれは親の仇だったから、嫌っているというか憎んでいるというべきだが。

本の主人公はその時点で他の男に何度も犯されているが、殺したいはずのその相手に犯されながら今までで一番乱れてしまうという話だった。

(嫌いな、相手……)

その瞬間、本に綴られる文字を何度も脳内で具現化した、主人公が親の仇に後ろから突かれるというその光景が、私とバルガスに入れ替わる。
トクン、と私の胸が高鳴った。

(いやいや……)

それはありえない。大体あの話だって、読み手の男性を喜ばせるためのただの作り話だ。

実際に憎んでいる相手に犯されて普段より感じてしまうなんて、あるはずがない。

そうだ。

父に散々酷いことをしたあの男に、野蠻で浅慮で加えて実力もない、大嫌いなあの男に私が？

(………)

いくらなんでもそれはない。

馬鹿みたいなことを考えてしまった。お風呂でも入って、頭を冷やそう。

ありえないことを考えてしまった自分に混乱しながら小走りで大訓練場を後にする私は、気付かない。

鼓動が僅かに早まっていたことに。そして、その私の背中を睨むバルガスの殺意と敵意の籠った視線に……

訓練場で一悶着があったその日の夜、私はそんなこと

を思い出しながら——ベッドに潜りつつ、寝間着の上から自身の股間を撫でていた。

「はあ……」

熱い吐息が零れる。

最早日課のように、私は自慰にハマってしまっていたのだが、この日はいつもとは違った。

私は普段、酷い目に合わされていることを想像しながら自分を慰めているのだが、その相手は本の中の登場人物であったり、完全な架空の人物であったり、もしくは自分とは接点がないような人物ばかりだった。

知人を相手に妄想するのは、好意的な人物であれば罪悪感が上回ってしまっても楽しめるし、逆に嫌いな人物であれば嫌悪感が上回って同様に楽しめるのだ。

……その、はずだった。

そう、私は今、おかしいのだ。どう考えても錯乱している。

嫌いというカテゴリ内ではトップクラスの位置に君臨するはずのあの男——バルガスが、頭から離れない。

昼間は理性で一蹴したその妄想は、私の胸の隅にひっそりと根付き、じわじわと、まるで毒が私の身体を蝕むかのように大きな欲望へと変化していった。

そうして私は今、その醜い欲望に抗え切れず、とうとう自分を慰め始めている。

冷静になった後に後悔すると理性ではわかっているのだが、ここまで興奮してしまっている状態ではもう止められない。

どうせ脳内での妄想なのだ。誰に知られるわけでもない。

（ああ……私、今から、あの男に……）

——コンコン。

と、突然部屋の扉がノックされた。

「ひやいつ!？」

そんなはずはないのだが、咎められたかのような錯覚に陥ってしまう。

咄嗟に出た返事は裏返し、とても間抜けな声を出してしまつた。

「セラです」

ノックの主は、私の身の回りを任せているメイドのセラだつた。こんな時間にくることは珍しい。

「……セラ？ いいわ、とりあえず入つて」

「失礼します。夜分遅くに申し訳ありません、リア様」

一礼して部屋に入つてきたセラは、普段通りのメイド服ではあつたが、その表情は険しい。

普段クールで有能な彼女が、感情を少しでも表に出すことは珍しいことだつた。

「それで、どうしたの？」

余程の事でなければこんな時間に訪ねてはこないだろう。

彼女自身の表情もあり、少し身構えてしまう。少なくとも、吉報ではないはずだ。

「先ほど、バルガス様の私室にゲルウエン様が入室されるのを目にしまして」

「……何よ、その気持ちの悪い組み合わせ」

ゲルウエンとは、私の両親と同じく王城に住むことを許された魔術師の一人であり、王城に滞在する魔術師の中でも最古参の老人だ。

バルガスが何の理由もなく嫌っている魔術師を自室に招いたとは考えにくい。

しかもその相手が古参の老害筆頭魔術師ともなると、二人の組み合わせは最悪だ。

「はい。私も同感でしたので、少々お話を聞かせて頂きました」

さらつと「聞かせて頂いた」などと言っているが、彼女はただのメイドではない。

当然本人たちから教えてもらつたなんて意味ではなく、何らかの形で話を盗み聞きしたんだろう。

正直、音を立てずに侵入して気付かれずにその場で話を聞きました——なんてぶつ飛んだ話であっても、信じってしまうかもしれない。

それができてもおかしくないと思わせるだけの能力を、彼女は持っている。

「肝心の内容ですが……要約すると、リア様への報復活動を企んでいるそうです。何やら怪しげな紙包みの受け渡しも行われており、決行日は三日後とのことです」

「……私？」

「はい。何に対する報復なのか、そして何をするつもりなのかは明言されませんが。とはいえ前者については、恐らく闘技大会で恥を欠かされたことか、もしくは本日の一件、あるいはその両方、くらいしかないでしょうね」

「……闘技大会はともかく、今日の出来事も当然のように知っているのね」

「それについても、偶然目にしまして」

「はあ……まあそれでいいわ。それにしても——」

「たつたあれだけの出来事で報復とは、実にあの男らしい。」

そこにゲルウエンが囁んでいるのは、考えるまでもなくその短慮さを利用するためであろう。

あの老人——いや、この王城に滞在する古参魔術師のほぼ全ては、自身の地位に病的なまでに執着をもっている。

比較的新参であり、若く実力のある私達一家が邪魔で仕方がないはずだ。

「如何なさいますか？」

……ふむ。

多少の嫌がらせ程度ならともかく、ここまできたら話は別だ。

具体的に何を企んでいるかまではわかっていないが、何かされるのを大人しく待っているというのも馬鹿馬鹿しい。

最悪、殺される可能性だつてあるのだ。

となれば話は簡単だろう。やられる前に、やってやる。

「そうね……とりあえずお父様とお母様には報告しないでいいわ。この一件、私だけで対処するから」

「了解致しました。私は何をしま、……!?」

突如、セラが膝をついた。

そして何が起きたかを理解する前に、そのまま崩れ落ちる。

「……悪いわね」

無詠唱による睡眠魔術。それを行ったのは、当然私だ。

さすがの彼女も、無警戒の相手に不意打ちされては防げないだろう。

この一件に彼女を巻き込むつもりはない。

何事においても有能なメイドであり、もしかすると暗殺を命じても卒なくこなしてしまうかもしれない。

だが、だとしても彼女はやはりメイドなのだ。荒事は本業ではない。

危険な真似をさせるわけにはいかないのだ。

とはいえ、私自身で排除するなどと言っても、素直に聞いてくれないかもしれないだろう。

関わってくることは間違いないし、下手をすると両親

に報告されてしまう可能性もある。

そしてこの一件が両親の耳に入った場合、娘である私の為に動いてくれることは間違いない。

だが、私の両親は所謂善人であり、言ってしまったえば甘い。

さすがに娘の身の危険ともなれば、下手人達を王城から排除することくらいはしてくれれると思うが、逆に言えばそれが限界だ。

恐らく、殺害という手段はとらないだろう。

それでは甘いのだ。そんなことをして逆恨みされ、後々の禍根を残すくらいなら、ここで断ってしまった方がいい。

嫌がらせ程度で済んでいる内はともかく、報復などと言い出したのであれば、もはや敵でしかないのだから。

覚悟を決め、ベッドに座ると目の前に魔力の渦を発生させる。

渦はどんどん広がっていき、内部に円状の空間ができあがっていく。

そしてその空間に、少しずつ映像が映し出された。

私が独自に編み出した、遠見の魔術である。

私の魔力が届く範囲ならどこでも見ることができると
いう魔術で、更に遠視先には魔力はほぼ発生しないため
気付かれることもない。

まずは二人の現状を確認し、場合によっては今夜中に
カタを付ける。

と、そんな覚悟を決めていた時だった。

バルガスの自室を映し出した映像から、突如嬌声が響
きわたってきた。

『ああ——っ！♡』

「——っ!？」

まるで予想していなかったその光景に、驚き硬直して
しまう私。

リアと同じ制服を着た王城のメイドと思われる少女
が、壁に手をつき、後ろからバルガスに犯されていた。

髪の毛をツインテールに結えた、私と同世代か、少し
上ぐらいの年齢の若いメイドだった。

制服は着たまますカートをめくられ、下着だけが脱が

されて右足首にかかっている。

この部屋に入った瞬間に無理やり襲われたかのような
格好だった。

——しかし。

無理やり襲われたにしては、少女の様子がおかしい。

『お、おやめくださっ……んひい♡』

どう聞いても感じているとしか思えないような声で、
少女が叫んでいる。

『ふははは……そのような声で言われてもまるで説得力
がないわ。気持ちがいいのだろうか?』

バルガスが、優越感をたっぷりこめた声で少女を揶揄
する。

『ちっ、違いまっ……ひ、ひいつ♡ こ、こんなこと、
許されっ……あっ、ああ……っ』

そしてそれを否定しようとする少女の声は、明らかな
歓喜の色が混じってしまっている。

やはり襲われていることはほぼ間違いないさそうなのだ

が、しかし少女は悦んでいた。

声だけではなく、乱暴に腰を打ち付けられているその局部からはパンツパンツという肉のぶつかり合う音とグツチャグツチャと卑猥な音が鳴り続けている。

「あ……う……」

余りの光景に、絶句する私。
性行為の場面なんて初めて見た。

文章とは違う、現実。

お尻を突き出して壁に手をついているメイドの少女は、切なげな瞳をしつつも、その口角は若干上がっていた。

『ああ〜っ♡ だめ、だめですうっ……!』

嬌声は、私が自慰の際に出してしまう声とは比較にならないくらい、淫靡だった。

顔が熱い。

確かめなくとも、自分の顔が真っ赤になってしまっていることが容易に伝わってくる。

『あはあああつ！すごいっ♡ こっ、こんなの、初めてえっ!! ひっ！ ひっ!♡』

なんて声を出しているんだろう。

……そんなに、気持ちいいのだろうか。

すっかり自慰にハマってしまったこともあり、性的な快感がどんなものなのかは理解している。

声を抑えようとしても、抑えられない。それも知っている。

だが、少女の喘ぎは、私のそれとはレベルが違う。

『ひいひいひい——っ!!♡』

悲鳴のような悦びの声に驚き、ビクリと身体が震える。いくらなんでも、ここまでの反応を示すことはありえるのだろうか。

演技？

そんなはずがない。

演技だとするなら過剰すぎるし、恐らくレイプされて



いるであろう彼女が、暴行を加えてきた相手を喜ばせる意味はまるでない。

「はあつ、はあつ……!」

いつの間にか、呼吸が荒くなっていた。
目の前の映像から視線を逸らせない。

『くくく……言うだけあつて、中々の効果ではないか』

『じゃろう？ 誰であろうと女であればこの薬の効果からは逃れられない。無論——あの小娘とて、な』

『くははは！ あの生意気な娘が無様によがる場面を想像しただけで気分が良いわ!』

『あーっ!♡ あーっ!♡ あーっ!♡』

ゴクリ、と唾をのみ込む音が脳内に響いた。

こんな光景を見せられたら、もう我慢ができない。

私は無心で下着を脱ぎ捨てて股を大きく広げると、下半身の突起物を乱暴に虐めだした。

すぐ近くに、眠っているとはいえセラがいるのに。

だが、止められない。
今までとは比較にならないほど興奮してしまっている。

「報復」とは、私を犯すことだったのだ。
受け渡されていたという紙包みは媚薬か何かで、たつた今あの少女に使用されているものなのだろう。

『待っているよ、小娘め……! 女の方際というものをわからせてくれる……!』

「くう、ひいんっ……!」

バルガスのセリフに、ゾクゾクと背筋を怪しい快感が流れる。

目の前の映像では、もはや無理やり襲われたなどといった。誰も信じないであろう程に、メイドは乱れ狂っていた。

このまま放っておけば、決行日である三日後に、ああしてバルガスに泣かされているのは私になってしまう。それを想像した瞬間、屈辱感と怒りが湧き上がり――

「んはああつ……!?!」

同時に、自身の指から送られてくる快感が激増した。局部から、じゅわつと愛液が漏れ出てくるのを感じる。

「あつ、あんつ、な、なにこれっ……!?!」

突起をぐりぐりと虐める左手が止まらない。どころか、その刺激に満足できなくなった右手が私のアソコへ出入りを開始した。

信じられないくらい指がスムーズに侵入する。まるで潤滑油を使ったかのように、滑らかだった。

途端、身体を快感が駆け巡る。

行為そのものは今までに何度繰り返したかわからないくらいに、私の中ではありきたりな自慰だ。

だが、気持ちよさのレベルが全く違った。

今までにしていた犯されるといふ妄想。

それが妄想ではなく、一気に現実味を帯びた今、私の身体は今までにない異常を示していた。

ドクン!ドクン!と、痛くなるくらいに胸を打つ鼓動。自分でも驚くくらいに固くなっている乳首。

そして何より、愛液の量がおかしいことになっている。

ダラダラといつまでも溢れ続けるその液体は、気付けばベッドに手のひらサイズの染みを作っていた。

『あはあーっ! 凄いい、凄いいいいッ!♡』

『パンツ! バチンツ! ドチュンツ! パチンツ!』

「あうっ、はあ、んはああつ……」

少女の凄まじい嬌声と、激しい性行為の音が私の耳を犯し、興奮を更に肥大させていく。

性的興奮で思考が埋められてしまった私は、左手の動きを止めないまま、本棚まで移動する。

傍から見れば相当に間抜けな光景のはずだが、今の私にそんなことを気にする余裕はない。

魔術で施錠した大きな本を慌てて開くと、中のページは全て四角く切り抜かれており、その空間には張り型が入っていた。

女が一人で自分を慰めるための、大人の玩具だ。

それを手に取ると本を片付けることも忘れ、床に伏した邪魔なセラを飛び越えてベッド横の壁までたどり着く。

そして映像を壁に映し出すと、壁に片手をつき残った手で乱暴に張り型を膣に挿入した。

「うあああああつ……」

ジュブジュブ、つと愛液を掻き分けて侵入してくる異物に、身体がビクビクと悦びの声をあげる。

やはり今までとは桁違いの気持ちよさだった。

映像に映し出された少女と同じような格好で、映像に映し出されたバルガスの腰の動きと同じタイミングで、張り型が動く。

目の前の少女に感情移入しようなどと考えたわけではない。本能のままに動いた結果だった。

『ああつ、もう駄目ッ！ 駄目ですバルガス様あつ！♡』

『ふん、ここか？ これがいいんだろう、淫売め！』

「あつ、あんっ♡、あんっ♡、あんっ！♡」

涎を垂らして映像を眺めながら、ただただ乱暴に手を動かす私。

普段の自慰よりも遥かに気持ちいい。それだけ興奮してしまっているのだ。

——けれど。

『そこおつ！ そこだめですっ！♡ ああ、だめ、だめ♡!!』

「くふうう……」

あそこまで、乱れるほどではない。なんなんだ、一体。

本当に、そんなに……。

我を忘れて叫んでしまうくらい気持ちいいのだろうか。

『バルガス様あつ！♡ もっとお、もっとお！』

『ふははは、とうとう本性を現したな、この淫乱め』

バルガスが嘲笑しながら更に激しく ドスッ ドスンとメイドの小さな尻に腰を打ち付けている。

そう、あいつはあんなに平然としているのに、対する少女は、正気を疑ってしまう程に乱れている。

ニヤニヤと男に見下されながらレイプされているのに、よがり狂ってしまふ。

それも、自分から媚を売ってしまったように。

それは私たち女性にとって、最大級の屈辱に違いない。

私だつたら、どれほどの怒りを覚えるだろう。

どれほどの悔しさを感じるだろう。

ああ――

『もう我慢の限界だろう。先ほどから中が小刻みに震えているぞ。そら、遠慮なく達するが良い、淫売』

『ああつ……！ い、イクつイク――ッ♡』

――なんて、羨ましい――！！

「んくうううつつ！！ イク…ツイクう♡」

少女の絶頂と同時に、私も達してしまう。聞こえるはずのない誰かに絶頂を宣言して。

張り型を挿れてから5分も経っていない。

異常に興奮してしまっていたせいかな、今までの中で最短と言える速さだ。

脱力し、そのままの体勢でいられなくなった私は、壁から崩れ落ち、ベッドの上に倒れ込む。

膣の中に入ったままだった張り型が、膣圧によりゆるん、と零れ落ちた。

「はあ、はあつ……」

『そら、中に出すぞ』

映像は壁に映し出したままなので、ベッドに横になつてしまった私からはもう見えない。

容赦なく中出ししていると思われるその声に、メイドは嬌声で答えた。

『さて、これで効果の程はお分かり頂けたかな？』

『うむ、悪くない。くはは、三日後が楽しみだ』

破滅願望

私は息を荒げながら、映像から流れる声をぼんやりと聞いていた。



第二話

C H A P T E R 2

取り調べ



破滅願望

-天才美少女魔術師が自分から犯されに行く話-

——三日後。

私は極限まで集中を研ぎ澄ませていた。余計な情報を遮断させ、ただ一つの感情を増幅させていく。殺意だ。他者を殺害しようとする意志。動機もなく、どころかそれを向ける対象すら居ない。それでも私は、淡々とそれを練り上げていく。

(……こんなものかしらね)

スイッチは既に入っている。世界が反転し、視界から色が抜け落ち、余計な雑音は知覚できない。

ハッキリと知覚できるのは、魔力と感情のみ。私は淡々と、練り上げた殺意を魔力と融合させていく。

……あの映像を見てから今日まで、私は全ての時間を準備に費やした。当然だろう、あんな男に身を委ねようとしているのだ。私がとち狂ってしまったことは最早否定しようがないが、保険は絶対に必要である。

そのために今、私は術式を生成しているという訳だ。あの男が私に一定以上の殺意を抱いた瞬間、即座に昏倒させる呪いの魔術。

練り上げているこの殺意は、そのための閾値だ。私が今抱いている殺意の強さを、発動条件とする。

殺意と融合した魔力を、更に術式へと浸透させていく。術式が壊れないよう、慌てずに、ゆつくりと。

そして——

「……ふう」

世界が、元に戻る。

完了だ。たった今完成した魔術を含めて、この2日とちよつとで独自魔術を3つも新規に開発する羽目になった。私が意識を失った瞬間にこの部屋まで強制転移させる転移魔術、対象が一定以上の殺意を持った瞬間に昏倒させる呪いの魔術、それからおまけの魔術を1つ。

さすがの私も、高難度に位置する呪いや転移に条件式を適用させた独自魔術をこの短期間で開発するのは骨が折れた。それでもなんだかんだと出来てしまうあたり、私の優秀さが伺えるというものだろう。いや、さすが天才。

「——それにしても」

やり終えた達成感と共に、ふうと一息ついた私は、部屋の片隅にある姿見に映った私自身を眺めた。

腰まで伸ばした柔らかな金髪。整った顔立ち。豊かに育った胸。そして白く透き通った肌——まあこれは、外に一切出ていないという不健康な理由からだろうけど。

率直に言つて、私は美少女だと思う。自分で言うのもどうかとは思うが、これは客観的な評価だ。変な謙遜はしない。……唯一の悩みは、齢15にもなつて陰毛が生えてきていないことだけど、人に見られるような部位ではないことが不幸中の幸いといったところか。

それに、悩みといえども一つ、最近になつて気になるはじめたことがある。

「……………」

おもむろに胸を揉むと、緩やかな快感がじんわりと広がっていく。

やっぱり以前と比べて、明らかに感度が向上している。が、それ自体は別にいい。自分で慰めるときだって、

何も感じないよりは気持ちいい方が良いに決まつてるから。

ただ——

むにゆりと、手を目いっぱい広げて鷲掴みにするが、ハッキリ言つて手に余るサイズだった。

この大きさは元々からではない。およそ半年ほど前から、一気に成長したのだ。

そしてそれは、ちょうど私が自慰を覚えた時期と一致する。

「く、……っう」

乳首を摘まんでみれば、途端に声を我慢しきれない程の強い快感に襲われる。

別に自慰が目的ではなかつたので、すぐに手を離れた。続けていると、簡単にスイッチが入ってしまうし。

「……はあ」

乳房と、乳首と——そして乳輪が、それぞれ元のサイズと比べて一回りは肥大化していた。

自慰との因果関係が確定しているわけではないが、私

はその可能性が濃厚だと思っている。

別に胸の大きさにこだわりを持つていたわけでもないのだけど、それでもこれ以上は育つてほしくないと思っ
ている。

単純に邪魔だし、見栄え的にも度が過ぎれば美しさを
損なう。

それに——見えない部分についてはともかく、胸のサ
イズがここ半年で一気に大きくなったことは、私に近し
い人間はもちろん、城内の関係者で私と少しでも関わる
ような者には、とつくに気付かれていると思う。

それが、無性に恥ずかしかつた。

私が半年前にオナニーを覚えたこと、それから暇を見
つけては自慰に明け暮れたこと、共に公言してしまっ
ているような気がしてなからかつたから。

「……………」

大丈夫、胸を揉めばそのぶん大きくなるなんて、迷信
に決まっている。

実際、規格外に大きな胸を持つ母親の遺伝だろう、自
慰のせいなんかじゃない、と自分を言い聞かせた。

私は改めて鏡に映った自分自身の姿を眺める。

無表情でいるはずなのに強気さが伺えるその顔立ち
は、私の内面をよく表していると思う。プライドが高く
て、負けず嫌い。私は誰にも負けたくない。だから、誰
にも負けない。

正直なところ、私は周りの人間なんて大半が無能だと
見下している。……いや、周りが無能なのではなく、私
が優れていると言うべきか。ここまでくると自惚れにな
ってしまうかもしれないが、しかし事実、王城内に私よ
り優れた魔術師なんて存在しない。

だというのに。

私は今から、遥かに格下の屑に犯されようとしている。

「……言い訳なんてできないわね」

かつて話したことのある同年代の馬鹿女達ですら、こ
こまで悪趣味ではなかっただろう。私が優秀であること
に変わりはないので、あのレベルまで落ちたなどとは欠
片も思っていないが、それでも褒められた趣味ではな

い。

——けれど、もう駄目なんだ。

メイドが犯される場面を見てしまったあの日から今日までずっと、あの男に犯されることを想像しただけで、身体が火照ってしまう。それが屈辱だと感じる理性は残っているというのに——いや、だからこそ。私は興奮してしまうのだ。

ああ、玩具に処女を捧げた時点で薄々気づいてはいたけれど。どうやら私は、相当な変態であつたらしい。

認めよう。

私はいつに犯されたい。

褒めるべき点なんて何一つ見当たらない、ほぼ全てが私よりも劣っているあの男に。下らない自尊心で父と私を目の敵にし、幼稚な嫌がらせを幾度となく仕掛けてきたあの男に。

馬鹿にされながら、見下されながら、死にたくなるような屈辱を与えられながら、犯されたい。

(う……)

そこまで考えたところで、身体がブルブルつと震えた。完全に期待してしまっている。仮に一度慰めて冷静になったとしても……恐らくもう無理だろう。この好奇心を堪えることは最早不可能だ。

と、そのとき扉を叩く音が部屋に響いた。

「リア様、セラです。緊急のご報告が」

「入って」

「失礼します。ユピテル様とセレス様が、先ほど王城を後にしました」

ユピテルとは私の父で、セレスとは私の母だ。

セラは一目でわかるほどに焦っている。それほどまでに大ごとなのだろう。最も、私は魔術開発と並行してあの二人の計画を調査していた為、既に何が起きているのか知っているのだが。

けれどセラは、今日初めてその情報を知ったはずであ

る。なぜなら、三日前にゲルウエンとバルガスが密会をしていたことも、その内容も、私の魔術によつて記憶から消されているからだ。

加えて、今日までの間に何かを察知したとしても意識しないように暗示をかけておいた。そうしなくては、密会の記憶が無くともすぐにバルガスとゲルウエンの計画に辿りつく可能性が高かつた故の措置である。

両親には、王城の魔術師としてとある任務が与えられていた。その為外出自体はずつと前から予定されていたことであり、バルガスとゲルウエンが今日を報復決行日としていたのは、まず間違いなく両親の外出に合わせたのだろう。

「同時に、第三騎士団長のバルガスが不穏な動きを始めました。尾行したところ——ユピテル様とセレス様を国王暗殺者として陥れようとしていることがわかりました。申し訳ありません、ここまでの大がかりな陰謀に今まで気付かなかつたのは、完全に私の落ち度です」

「……」

予想、いや、予定されていた通りの報告を行うセラ。

両親が王城を後にしたのはたった1時間前だ。そこから即座にバルガスの動きに気付き、あまつさえその内容までも正確に掴むのは流石という他ない。

「……そう。セラ、急いでお父様とお母様の下に向かつて、それを伝えてきて」

「お二人の下にですか？　ですが——」

「こつちは私に任せて。説明している時間は無いけれど、あの男の好きになんてさせないから。それよりも、今すぐに行つて。一刻も前に出発しているのだから、急がないと追いつけないわ」

「……わかりました。くれぐれも、お気をつけて」

「ええ。セラもね」

そうして、部屋から出ていくセラ。これで、私を守る人間は……

一人もいなくなつた。

「見つけたぞ、小娘」

「……またゾロゾロと、何でしょう。今日は魔術の鍛錬日のはずですが？」

半刻後。訓練場まで足を運んでいた私は、バルガスを筆頭とした、第三騎士団の兵士達に取り囲まれていた。

「魔術師、リア・アズライト。王族暗殺犯容疑者の娘として、貴様を拘束する」

「……はい？」

「おっと、残念だが証拠と思わしき物も見つかっているのな、大人しくしていた方が身のためだぞ。まあ、抵抗するのならそれはそれで構わんがな。くつく……」

「……」

これが、私への報復計画として立てられた筋書きだ。捨て駒を用意して、父と母が王の暗殺を企んでいると告発させる。証拠もあるとなれば、騎士団が動く。いや、

動かざるをえない。

無論、そんなものは根も葉もない捏造だし、正式に調査が開始されればすぐに疑惑は晴れるだろう。だがその間、親族である私は当然拘束される。それこそがバルガスと、ゲルウエンの狙い。

王暗殺などという大それた嫌疑をかけられては流石に抵抗するわけにはいかない。そしてここまで大事にしつつも、バルガスの立ち位置は騎士として容疑者を拘束、調査を行ったというだけのことである。

両親の嫌疑が晴れた後に罪に問われることはないだろうし、何かあるとしてもそれは用意した捨て駒の方へと向くのだろう。そして当の捨て駒については適当なタイミングで始末してしまえば、黒幕であるゲルウエンとバルガスまで辿りつくことはないということだ。

まあ、罪人ではなくあくまで容疑者の拘束であるため、本来であれば私の身はある程度保障される。刑に処されるだとか、情報を吐かせるための拷問を受けるだとかは、容疑が確定した後の話だ。

だが、言うまでもないことだが、今回に限ってはそう

はいかない。このまま大人しく私が着いていけば――

(……)

それを考えた瞬間、下腹部の奥が、キュンと疼いたよ
うな気がした。

――取調室。

抵抗せずにバルガスに続いて部屋に入ると、直後にバ
タンと扉が閉じた音がした。誰かが入ってきた気配はな
い。この男との二人きりだ。

小さな部屋に、小さな机が一つ。そして両脇には丸椅
子が置かれており、その他には何も無い。大人しく椅子
に座ると、対面側に座ったバルガスがなみなみと液体が
入った小瓶を机の上に置いた。

「さて……。これから貴様には取調べを受けてもら
うが、その前に、これを飲んでもらおうか」

「……これは？」

「何、ただの魔力拡散薬だ。さっさと飲め」

(魔力拡散薬……ねえ)

私を暴れさせないため、という建前なのだろうが、例
の媚薬入りなのは間違いない。

実際のところ、ただの魔力拡散薬ならば魔力を収束し
にくくなるだけで私であれば魔術は行使できる。だがあ
の媚薬が含まれているとしたら、私は恐らく抵抗できな
いだろう。

魔術を使える使えないの話ではなく、目の前の男に犯
されるという屈辱ゆうじやくに抗い切れなくなる。逆に言えば、ま
だ理性が残っている今が最後の分水嶺だ。

ここまで来て何を今更、と思わなくもないが、しかし
ここまで来てしまったからこそ、迷いが生じる。

妄想だけならばいい。けれど、それを本当に受け入れ
てしまったら――私は、一生消えない汚点を背負って生
きていくことになる。

当然事が済めばこの男やゲルウエンは始末するつもりだし、他に知っている人間がいれば消すだけなのだが、しかしそういう問題ではないのだ。

まず他ならぬ私自身が知っているし、例え自分の記憶を消したとしても、こいつに汚されたという純然たる事実は消えはしない。

「……まだ、私は罪人ではないはずですが」

「ふん。罪人でなくとも、武器は押収する。魔術師である貴様の武器は魔力だろう。つべこべ言わずにとつとと飲め、小娘」

「……」

じゅん、と。下着を汚した感触がした。

(——ふ)

心の中で自嘲してしまふ。いや、本当に今更だった。つい半刻ほど前に考えたばかりではないか、私はもう駄目なんだと。

仮にここで冷静になって目の前の男の魔の手から逃れたとしても、最早関係ない。暫くはこれまで通りに自慰で誤魔化し続けることになるのだろうか、いつか必ず限界が来る。

魔術でこの歪んだ性癖を消し去るといふ手段もあるにはあるが、果たしてそれを私が選ぶかどうかと言えば——考えるまでもない。だって、これまで機械的に生きてきた私に、唯一芽生えた楽しみなのだから。

そう、結局の所。

遅いか早いか、ただそれだけの違いなのだ。

「……」

私は、目の前に置かれた魔力拡散葉を、グイと飲み干した。

「う……」

瞬間、胃の中がカツと熱く火照りだす。……成程。無理やり襲われたメイドがあそこまで乱れたことから、余程強い薬なんだろうということは想像できていたが、ま

るで強い酒を飲んだときのような刺激だ。一年前の成人の儀の時に初めて飲んだお酒もこんな感覚だった。

「飲んだな」

バルガスがにやりと笑う。私は無言でジッと睨み返すと、癪に障ったのか笑みを潜め、面白くなさそうに吐き捨てた。

「ちつ……相変わらず生意気な面だ」

「……それはどうも、申し訳ありません。生まれつきなもの」

「ふん。……まあ、今回ばかりはその強情さが仇になったのだがな。突っ張る相手を間違えたな、餓鬼が」

「……どういう意味でしょうか」

「あの老いぼれはゴチャゴチャと煩わしいことを抜かしていたがな……俺は回りくどい真似は嫌いなんだ。本来、貴様程度にここまで下らぬ策を弄する必要はなかったというのに」

「……仰る真意はわかりかねますが、ご自身の言動には少し気を使った方が良いのでは？ 今の口振りでは、まるで——」

「ふん。単刀直入に言うぞ、貴様の親の命はこの俺が握っている」

バルガスは私と会話する気がないとでも言うかのようになり、そう言い放つ。茶番でしかないが——私はもう、こいつの思惑通りに動くことしか考えていなかった。

「貴様のような生意気な餓鬼がここまで大人しく着いてきたのも、大方すぐに解放されるとでも思っていたからだろう。だが残念だったな、証拠は全てこちらが用意したものだ。このままであれば貴様達一家はすぐに処刑されるだろう。国家反逆罪——それも、国王暗殺未遂などというとびきりの汚名を背負ってな」

「……成程。騎士の割には人間ができていないとは思っていたけれど——ここまで屑だったのね」

「くはははっ！ 口の利き方に気を付けろよ、小娘！ 俺の機嫌を損ねれば、貴様達の命は消し飛ぶのだぞ」

その内容とは裏腹に、愉快さを押し切れないと言った様子で叫ぶバルガス。

「……」

「状況は理解したか？ 貴様達が助かる道は一つ——この俺に、服従することだ」

心臓が破裂しそうな程に強く胸を打っている。

「……冗談。誰が、アンタみたいな男に」

「くつく。ならば、親を見殺しにするか？」

「……っ」

ニヤリと笑ったバルガスが、机を横に蹴とばした。ビクリと反応した私は、咄嗟に椅子から腰を浮かせて半歩後ずさる。

バルガスは軽く笑みを浮かべながら、カチャカチャとベルトを外しはじめた。

「なんのつもりっ！」

「何、往来より女とは男の慰み物と決まっている。それを理解していない貴様に、自分の身の程をわからせてやろうと思つてな……まずは、舐めてもらおうか」

「ふざけっ……近づかないで！ それ以上近づいたら、容赦しないわ！」

「くははは……わかつているのか？ 俺の言う事に従わなければ、貴様共々一家の命はないのだぞ」

あくまで私は無理やり襲われなければいけない。例え脅されようと、バルガスの目的が私を犯すことである以上、ただ抵抗を続けていけばいい。そのうち焦れて襲い掛かってくることは間違いないのだから。

だから、ここで私は抵抗しなければいけなかった。単純に暴れるか、逃げ回るか、もしくは制御が効かないフリをして半端に魔術を行使してみてもいい。

とにかく抵抗さえするのであれば、私のとる選択肢は何でもよかつたのだが——

ベルトが外れ、ストンとズボンがズリ落ちたのを目に

した瞬間、私は固まってしまった。膨張したバルガスの男性器が、下着を押し分け、その先端を露わにしていたのだ。

「くく、生意気な貴様を躡けられると思うと、年甲斐もなく滾ってしまうな。おや、なんだ、コレが気になるか？」

「――、う、あ」

嘲笑しながら、下着を脱ぎ捨てるバルガス。今すぐこいつを罵らなければ、抵抗しなければと理性は訴え続けているのだが、動けない。私は腰を抜かしたかのように尻もちをついてしまっていた。

男性器。雄の、性器。メイドが犯されているのを見たときは、既に繋がっていた為、こうしてマジマジと全貌を見るのは初めてだ。

なんて歪なカタチをしているんだろう。大きさも、愛用している張り型よりも一回りは大きい。私の性器が疼いてしまっている。待ち望んだモノが目の前にあるのだ。今から私の中に、アレが入るのだ。

「あ……い、今すぐ離れないと、ただじゃ……」

ずりずりと、尻もちをつきながら後ずさっていた私の背に壁がぶつかる。いつの間にか部屋隅まで来ていたらしい。バルガスはそんな私に構う様子もなくスタスタとこちらに近づき、そして――

「さあ。舐めろ」

少し顔を寄せれば触れてしまう程の近距離に、バルガスの、雄の性器が、ある。

「はあつ、はつ……」

（な、なん……め、目が、離せない……）

息を荒げながらも、視線を動かすことができない。目の前にさらけ出された雄のシンボルに、釘づけになってしまっている。これじゃあ、まるで私が男の汚いモノを見せつけられて興奮しているみたいじゃないか。欲情してしまっているみたいじゃないか。

心臓の音が、何度も何度も爆発しているかのように煩い。

「どうした。早く舐めろ」

ありえない。ここで大人しく従ってそんな真似をするのは、私ではない。いくら抵抗できない状況とはいえ、そんな無様な真似を私はしてはいけない。無理やり穢されないといけないのだ。

目前に晒された男性器から、むわあつとむせ返るような匂いが、鼻孔に届いた。

(あ、あ、あああつ……♡)

臭い。臭い。なんて醜悪な臭い。これが雄の性器が発する臭いだというのか。吐き気を催しかねない臭さであるにも関わらず——私の膣は、ぴくぴくとひくついていった。

呼吸と共に臭いを吸い込む度に、じゅん、じゅんつと、子宮が鼓動し、愛液を分泌しているのがわかる。下半身が、切なく疼いてしまっている。意味が解らない。いい匂いだと感じているわけでは断じてないのに。本当に臭い。気を抜けば嗚咽してしまいかねない程の悪臭である。だというのに、私の下半身は反応してしまっている。

いや、生物学的に考えるのであれば、何も不思議なことではない。動物は種を残すことが生きる上での主目的なのだから、異性の匂いで発情してしまうというのは、理に適っている。

——私が？

他者を見下し、実際にそれが許されるだけの能力を持ち、知る限りでは並び立つ者なんていないほどに魔術を極めて、天才だと持て囃されて。

そんな私が、ああ、こんな醜いモノを見せつけられただけで、

(は、発情、してる？ こいつの性器を見て、匂いを、嗅いで？)

——ゾク、ゾクン。

「くく……迷うことはない。何せ貴様は、親を人質に取られているのだから。俺の言うことに従わなければ、いけないのだ」

「あ……あ……♡」

フルフルと全身を震わせながら、私は顎を上げるようにして口元を男性器へと近づけていく。

（何をしているの、私は……今すぐ突き飛ばして、コイツ自身に襲わせるように仕向け、て……）

確かにそう思考しているはずなのに、行動が伴わない。僅かに舌を突き出して、小刻みに震えつつ、バルガスの性器へと徐々に近づいて――

チロリと、舌が、触れた。

「…………ツ」

しょっぱさと苦さが合わさったような気持ちの悪い味と共に。脳に、ビリビリとした痺れが走った。

「く…………くく、くははははッ…………！ 小娘ッ、いいザマだな!? どうだ、男の逸物を舐めさせられた気分はッ！」

舐めた。舐めてしまった。こんな男のペニスを。逆らえないという状況こそ用意されていたものの、無理やりではなく、自ら舐めたのだ。要するに前戯である。性交

をする前の、準備のための行動。それはつまり、今から目の前の男を受け入れますという意味表示であり、これ以上無い服従宣言だ。

違う、違う、こんなつもりじゃないのに。

「はあっ…………黙れ…………んう…………」

痺れが止まらない。身体への直接的な快感ではなく――

脳が。ゾクゾク、ゾクゾクと刺激され続けている。

チロチロと舐める度に背筋から脳へと駆ける痺れ。それに陶醉していると、バルガスが腰を押し出し、汚らしい性器を無理やり私の口内にねじ込んだ。

「むぐうっ?!」

「くつくく…………今だけはその無礼な口利きも許してやろう。今の貴様に何を言われたところで、気分がいいだけだからな」

バルガスの性器の臭いが、私の口の中に充満する。

「……………つ、……………ッ」

意外にも、というべきか。明らかに興奮してしまっているが、同時に目の前の男に対する怒り、悔しき、嫌悪感が、私の感情を占めている。それはそうだろう。本来であれば、こんな男の性器を口に含まされるなど、ありえないことだ。あつてはいけないことだ。それも、これ以上無いほど最低で、嫌いな男に。

以前の私であれば、自害してもおかしくない状況である。いくら変態的な願望に目覚めてしまったとはいえ、私が私でなくなつたわけではないのだ。こんな男に屈することを許さないと訴える私のプライドは、私の心にもだざり続けている。

そんな私^{プライド}が、心の中で叫び続けている。ありえないと。こいつを今すぐ殺せ。後悔させる間も与えずに絶命させてしまえと。魔力拡散薬なんて関係ない、私ならそれができる。

「ちつ……………歯を立てるな」

偉そうに私に命令してくるバルガスを上目づかいで睨

みつけると、バルガスはニヤリと嘲るように私を見下してきた。そして次の瞬間、私の頭を両手で抑えつけると、激しく腰を前後に振ってくる。

「ふむう——ッ！ んむつ、ぐつ、ごふッ!!」

ゾク、ゾク。

「くくく……………碌に奉仕もできぬようだからな、俺が勝手に使つてやる。有難く思えよ」

「かつ、うぐ、んごふつ！」

ゾク、ゾク、ゾクッ。

つう、と、頬を涙が伝った。苦しい。悔しい。気持ち悪い。なのに、これは。

身体が、いや……………心が、喜んでる。

直接的な快感は一切ない。乱暴に口の中を汚されて、ただただ苦しい、本当にそれだけだ。

——だと、いうのに。

「おぐつ……おごつ……!♡」

脳が掻き混ぜられているかのように、異常な程の痺れを感じている。何だ、これは。

気が付けば、壁にもたれかかるようにしていた姿勢から大分ずり下がっており、今や頭部と肩あたりしか壁に接していない。ほぼ床に横になっているような状況だ。バルガスはそんな私の頭を抑えつけて、強引に私の口を犯している。

そんな屈辱的な状況を改めて認識すると、更に痺れが増す。犯されることで無理やり気持ちよくさせられてしまうというのは予想していた、というより、それを望んでいた。

だがこんなものは、望むどころか想像すらしていない。身体はただ苦しいだけなのに、脳がビリビリと痺れて、心地いい。

いや。そうだ、これは――

(きつ……気持ち、いい……♡)

知らない間に、腰が浮いていた。乳首は服の上からわかるくらいに固く尖り、下半身からはダラダラと液体を垂れ流れている。

「んぐつ……ふむー♡ んふー♡」

ジュポジュポと、男性器に私の唾液が絡まる音が響く。口を強引に犯されながらも私は、歯を立てないように細心の注意を払って、バルガスに奉仕する。意図的に。

直後、私の心を占めているストレスが更に増幅し、同時に、脳の痺れが強くなった。

(は、ははっ……苦しくて、ムカつくのに、気持ちいい……♡)

やばい。私は本当に変態なのかもしれない。苦しくて仕方がないのに、脳で感じるなんて。これはさすがに異常なのではないだろうか。

身体の反応にショックを受けつつも、その理由はハッキリとしている。私だって、ただ苦しいだけでこんなことにはならない。例えば愛用の張り型を強引に喉奥まで

何度も突っ込んだとしても、今私の脳を暴れまわっているこの痺れは全く生じないだろう。

そう、理由なんて決まりきっている。この男にこんな屈辱的なことをさせられているから。その状況に心が興奮しすぎて、快感を生みだしているのだ。そうとしか考えられない。肉体的には苦痛でしかないのに、心が喜んでいいる。

「くはははっ……!! 気分がいい! まだまだこんなものではないぞ、これからたっぷりと躰をしてやるからなッ!!」

ゾクゾクゾクツ!

バルガスに蔑まれると、脳に、背筋に、異常な痺れが走る。やつぱり、そういうことなんだ。

「んぐうーっ! んう、ううっ!!」

ジタバタと、全力で暴れてみる。が、私の細腕にとつては圧倒的ともいえる力で抑えつけられ、抵抗と言えほどの抵抗にもならず口を犯され続ける。それが、今の私の現実。

(ち、力が、入らな……)

身体が抵抗したくないと訴えているとでもいうのだろうか。元よりさして力があるわけではないが、徐々に力が抜けていく。

私の頭を抑えつけているバルガスの腕に抵抗していた私の腕が、パタリと床に落ちた。最早、完全に為されるがままだ。

「ふん、やはり小娘の口程度では物足りんな……そら、苦しいか? そら、そら!」

「ごっつ!♡ おごっ、ぐっ、んむっ、おええっ!!♡」

ああ、やばい、これ、やばい、出る。やばい、やばい。

(う、嘘っ……)

「くくく……なんとみつともない面よ。下らん澄まし顔よりもお似合いだぞ、小娘ッ! ふははははっ!」

バルガスの、愉悦たっぷりの声が届く。

「うーおツツ……♡」

じわああああ。

下着が、愛液とは違う、温かい液体で溢れた。そして次の瞬間、下品な音を部屋に響かせる。

じよわ、びちゃ、びちゃびちゃびちゃびちゃつ。

「むっ……」

バルガスが気付く。それは。下着のまま放尿してしまつた音に間違いなくて。

「おい、貴様……」

じよろろろろ、じよろ、ろろ……。

下着を突き抜けて勢いが削がれた液体が、弱々しく床を濡らしていく。

「う……あ……」

「く——はははははッ！ まさか、漏らすとはなッ!!」

私の口から、ズルリと性器が引き抜かれる。濡れたペニス勢いよく揺れながら飛び出し、私自身の唾液が顔にパタパタと飛び散つた。

「はあっ……はあっ……げほっ！」

碌に呼吸ができていなかった私は、咳き込みながらも涙目で酸素を供給する。

「ふははは……貴様がこれほどまでに無様を晒すとは……」

バルガスは心底愉快そうに私のスカートに手を突っ込むと、そのまま勢い良く下着を脱がしてきた。そして何かに気付いたかのように、バルガスの動きがピタリと止まる。ここまでの醜態を晒してしまった私に最早抵抗する気力はなく、グツタリと横になつたままだ。

「くっ、くくくくっ……おいおい貴様、どこまで俺を笑わせれば気が済むのだ。赤子のように漏らしただけではなく、よもや生えていないとは……いや、小娘とは思っていたが、まさかここまで餓鬼とはな。貴様、それでも

成人した女か？」

かあつと顔が熱くなる。

「うるさい……見るなあつ、変態、人間の、屑ッ……！」

私は弱々しく両手で顔を隠して悪態をつく。未だ生えていないことを知られてしまうのは覚悟していたことだ。どうせ殺すのだから、と堪えていたが、私の唯一のコンプレックスといつてもいい事実を馬鹿にされ、私は興奮よりも先に、激しい羞恥に襲われていた。

「くくくつ……衣服の上からでもわかるくらいにココを固くしておいて、よくもそんな口が利けたものだな」

そのとき。

脳が感じるという予想外な出来事に続いて、またも予想しえなかったことが起こった。

くにゆう、と、両胸の先端に刺激が与えられる。漏らした上に無毛を知られ、余りの恥ずかしさに顔を隠していた私からは見えなかったが、恐らく両乳首を摘ままれ

たのだろう。だが、それを理解する前に、絶叫した。

「きゃうううううううッ!?♡」

ビクン！ と上半身が跳ねる。何が、起きたのか。

「おやおや、なんだ今の鳴き声は」

くり、ぐにゅ、ぐい、ぎゅう。私の乳首が、好き放題こねくり回されている。

「あひつ、ちがあつ、ちつ、んひいっ、ああつ、んやつ、にやつ、やめああつ……」

(なに、なにこれ、なにこれ、なにこれえっ……♡)

身体がビクンビクンと跳ねさせられている。乳首から暴力的といつていいほどの快感が雪崩こむ。今までに何度も弄つたことのある部位ではあるけれど、あくまで性器の補助的なもので、ここだけでは満足できるほどの快感は得られない——と、思っていた。

「ひつ、ひいっ♡ やあつ、んはあつ……！」

先ほどまでの痺れとは全く違う、外的な刺激による、圧倒的な快感。なんて気持ちよさ。

「くくく……いいか、小娘。これが女というものだ。貴様ら女どもは、男に馴染られればそれだけで無様によがる生き物なのだ。自らの身の程というものを、しっかりと理解しろ」

「ひやあああああつ♡ ふつ、ふぎ、ああうんっ!？」

「どうした。言いたいことがあるのなら遠慮なく言ってみるがいい」

不意に、今まで転がされるように弄られていた乳首が強く、ぎゅうううう、と無遠慮につねられた。

「つくうううう!♡」

「くくく……ご満悦か? 随分と気持ちが良さそうだな」

バルガスの言葉に、またしても脳が痺れてしまう。そのせいか、更に乳首の快感までもが増した。さっきまで、こいつに馴染られるという屈辱だけで精神的に蕩けてしま

っていたというのに、こんな快感と合わさってしまったら――。

小水でびしゃびしゃになってしまっている私の性器から、ぷしゅつと尿ではない液体が漏れた。物理的にも、精神的にも溶かされてしまった私の身体が、喜んでいる。

(や、ばい……きつ……気持ちよすぎるッ……!)

私はなに一つの抵抗をせず、ただただ与えられる快感を貪欲に味わっていた。全身の力が抜け、バルガスの手によって乳首が歪に形を変える度に、ガクガクと身体が震えてしまう。

するとバルガスの手の動きが、乳首だけを弄るのではなく、私の両胸を鷲掴むようにしての愛撫へと変わった。それによって、無理やり声を絞り出されるような狂おしい刺激が和らぎ、甘い快感が胸から上半身へとじわじわ広がっていく。

未だ保たれ続けていた怒りと悔しさに、不純物が混じりはじめた。破裂しそうな程に胸を打ち続けていた鼓動が、やや締め付けるようなものへと変化していく。

(くう、うう、この、感情は——)

——切ない。

そう、切ないのだ、これは。

「ふわあああああつ……♡」

くりくりくりくりくり、と固くなった乳首が弄られて、恍惚とした声がでてしまう。

頭がぼうつとする。視界はモヤがかかったようにぼやけ、胸が、子宮が。キュン、キュンと疼いている。

自身の手だけじゃ到底得られなかった気持ちよさ。忌むべき相手の手による愛撫に、否応なく昂ぶらされていく。だんだんと思いができなくなってきた。

(あ、ああああ……、たつ、堪らない……♡ これっ、切なすぎて、駄目になるう……っ)

なんて、単純。先ほどバルガスは言った。女は男に勝たれれば無様によがる生き物なのだ。

悔しいけど、否定したいけど。

それは恐らく、正しい。そもそも雌の役目は、雄の子を孕むことだ。であれば、雄に可愛がられて本能レベルで悦んでしまうのは当然と言える。

「ふん……そろそろ理解できてきたか？ 自分の身の程をな」

そう、そうだ。所詮私は女で、雌。胸を乱暴に揉まれて、小刻みに震えながらダラダラと愛液を垂れ流している今の私が、それ以外の何だというのだろうか。

こんなヤツに「男」を感じて、私という「女」がメロメロにされている。泣きたくなるほどに屈辱的なのに、溶けてしまうのではないかと思うほどに脳髓が痺れきっている。身体は切なさ支配され、目の前の雄を欲しがっている。

「あはああああ……♡ たつ、だめへえええ……♡」

いつしか聞いた、男に媚びきつたような甘えた声。そんな情けない声を、この私があげさせられてしまっていた。私の性癖がこれ以上無いほどに満たされている。

それを示すように、床に横たわっている私の両脚がいつの間にか大きく開き、がに股になつていた。バルガスに動かされたわけではない。男を求めて、下半身を無意識に広げていたのだ。すぐにペニスを、受け入れられるように。

「くくく……物欲しそうな面をしているぞ、小娘。どうだ、これが欲しいか？」

「あ……」

バルガスが私の胸から手を離すと同時に、喪失感を覚えてしまう。が、すぐに意識がうつる。バルガスが自身の性器を片手で握り、私の性器に近づけてきたからだ。

（欲し、いい……）

なんとか言葉にするのは抑えて、心で叫ぶ。

ついに、ついに、ついに……

この男に、魔術師というだけで幼稚な嫌がらせをするような、葉を盛って無理やりメイドを襲うような、それ

でいて私に数段劣るこんな最低の屑に、犯される！

「はっ、はっ、はっ♡」

最早期待してしまっていることがバレバレだろう。息を荒げて頬を赤らめ、涎を垂らしながら股を広げたまま、私の視線は再びペニスにくぎ付けになり、ただただ挿入されるのを待っている。

「くくく……欲しかったら、その口で俺に頼んでみる。どうか挿れてください、とな」

バルガスは私の状態を見透かしたような笑みを浮かべて、私を見下ろす。

「う……ううつ……」

ゴクリと、喉がなった。そして、私は――

「ふぎげ、ないでっ……！ 死ぬ、屑っ、アンタは絶対に許さない、告発して、騎士団長なんて立場では居られなくしてやるからっ……！！」

平常時であれば間違いなく激怒していると思われる私

の言葉に、しかしバルガスはふんと鼻でと笑うと、私のだらしなく菱形に広げてしまっている脚の付け根、股に手を突っ込んできた。

ごちゅん!!

「おっひ♡!?」

なんて声を、なんて思う間もない。あつという間に膣に侵入してきた、太くゴツゴツとした二本の指が、私の性器を蹂躪した。強引に。乱暴に。

自分で慰めるときとは全く違う、私の身体を一切顧みない暴力的な愛撫。

ごちゅつ! ごちゅ! ごちゅつ!

「アヒャあああつ!! だつ、やめつ!♡ つあ——
—!!♡」

神経が焼き切れたのかと錯覚させられる。もはや声を我慢するだとか、そんなレベルではない。バルガスの指が動く度に、強制的に叫ばされてしまう。痙攣させられてしまう。

ぶしゃつ、ぶしゃつと股間から液体が飛び出る音がする。女性を労わることなどまるで考えていないであろう指使いに、ありえないほど気持ちよくさせられている。これは、こんなものは愛撫ではない。自分勝手な、男が嗜虐心を満たすためだけの辱めだ。

「くううつ、それ、やめへつ……♡ だつ、あつ、ああ
くくくつ……♡」

ぐじゅ、じゅく、ごり、ぶじゅッ! びゅつ、びゅし
やあつ!

容赦なくバルガスの指が私の膣壁を強くなぞる。たつたそれだけで私は全身をガクガクと震わせ、下半身から恥ずかしい液体を次々と垂れながしていく。余りの快感に身体が強張り、股は水平に近い角度で開いていた。

ぐぼつ ごちゅつ! ぶちゅんつ!

「随分と浅ましい姿だな? ……なあ小娘よ、貴様、忌々しくもこの私を軽んじていただろう」

「あふつ……? あつ、ひあつ、くあああつ……!」

「思い出すだけで憎々しいがな。貴様はそういう目をしていた。他者を全てゴミと思っっているかのような、私をまるで価値のない人間であるかのような」

唐突にバルガスが語り始める。同時に手の力が弱まり、私の性器から送られてくる尋常でない快感も少し落ち着きを見せた。

「事実、貴様は魔術師の中では『それなりに』優秀であるらしい。まるで本気を出していなかった余興とはいえ、私に勝つくらいだからな。確かに魔術師としては実力があるのだと、この私が認めてやろう」

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ。

「んはあああああ……っ♡ あっ、あっ、あっ、あはあ……」

膣を搔くような動きから、緩やかに挿入を繰り返す優しい動きへと変化する。このくらいであれば、激しさだけは自分で慰めるときと同じ程度の強さなのだが、その快感の質は桁が違う。

甘い、甘い甘い甘い快感が性器から脳天にかけてじわあああつと広がり、私の身体が蕩けていく。ずっとこうして可愛がってもらいたいと思っってしまうくらいに、気持ちがいい。

「そして俺は能力主義だ。実力があるのであれば、他者を見下すのは当然のことだ。この俺も、貴様達魔術師のことは見下しているしな」

ああ、馬鹿な男が、馬鹿な事を言っている。たった今私は、そんな馬鹿の愛撫で気持ちよくさせられていると思うと、そして抵抗できずにあんあん喘がされていると思うと、堪らなく背筋がゾクゾクする。

「だがな。貴様のようなガキ、それも女であれば話は別だ。いいか、女は黙って男の後ろにいれば良いのだ……出しやばるな！ 貴様ら女は、ただ男に尽くすだけの存在だ！ 子を産み、育てるだけしか価値がない！ そんな女が、貴様が、この俺を、よりもよつて、み、見下すなど、絶対に許さん!!」

ぐちゅう！♡

太い指が、膣の天井を殴るように抉る。

「っあうううう♡!?」

ああ、本当に最低だ。こんな男に弄ばれている。こんなレベルの低い男に、いいようにされている。

「……………く、く、くはははは……………」

勝手に盛り上がったかと思つた直後、バルガスは突如笑い出した。

「それがなんだ、このザマは！ どうした、俺をゴミでも眺めるかのように見ていたあの目はどこへいった！ 貴様は今、そのゴミに股をほじくられてよがり狂つているそれ以下の牝豚よ!!」

にゅちゅん、ぬちゅつ、ぐちゅつ、ごちゅつ!!

再び乱暴な愛撫が再開される。

「ああ——っ！♡ やつ、やめてへえっ！♡ だめっ！♡ だめえっ！♡」

能力主義などと言いながら男が絶対であると考える徹

底的な男尊女卑、それでいて自身の能力が追いついていない哀れな男。バルガスは今、私に感じていたであろう劣等感、そして鬱憤を好き勝手に発散している。私の身体で。私を、玩具のように弄りまわして。それが、私を駄目にする。

(さ、逆らえないっ……………!)

逆らうことなんて、本来簡単のはずなのに、できない。身体が——いや、それ以上に心が、屈服してしまっている。だつて。

こんな屑にいいようにされて、嬉しいのだ。

脳内麻薬が異常に分泌されている。私が夢見た体験を、今まさにしている。それでいて、途方も無いほど気持ちよくさせられている。

バルガスが言うとおりに、ただ性器を指で刺激されているのに過ぎないのに、私は最早自慰で迎える絶頂時よりも満たされていた。媚薬と性癖による相乗効果なのだろうが、それでもまさかここまで乱れさせられるなんて。

「どうだっ！ どれほど能力があろうとも、貴様は所詮

この程度の存在だっ！ 多少気持ち良くさせられた程度で、簡単にプライドを投げ捨てる！ わかったか！ 女はそうして、ただ男に媚びていればいいのだ!!」

「~~~~っ!!♡」

ゾクゾクゾクゾクゾクゾクツッ。

ああ、やめて。これ以上私を、興奮させないで。

「どうしたっ……返事をしろ、牝豚ツ!!」

駄目だ、駄目だ、言葉にするのだけはいけない。私は自分から抱かれているんじゃない、無理やり襲われているのだから。私は、優れているんだ、だからそれだけはダメだ、あくまでこれは、そう、遊び、こいつを使つた私が主体の遊び、だから、私はっ……!!

「はっ……」

(——あ)

「はiiiiiiii……っ♡」

その瞬間。

全身を凄まじいほどの電撃が、駆け巡った。

「かふっ——」

一瞬何が起きたのかわからないほどの快楽に。

下半身から脳天まで、貫かれる。

言葉にただけで。認めたただけで。

そこに。

「くっ……はは、ははははははははっ!! 認めたな! ついに俺に、服従したなッ!! はははははははは!! よからう、褒美だっ!!」

ごちゅごちゅごちゅごちゅッ!

ずちゅぬちゅぐちゅごちゅッ!

ぬぼ、ぬぼ、ぬぼんっ、ぬぼっ!



ぶしやあああああつ!!!

未知が、私の身体を塗りつぶしていく。

凄まじい絶頂感。

性器から、許容量を超えているとしか思えない快感信号が狂ったように送り込まれて、頭が真っ白になる。

ピンと、海老反りに固まった身体の中で、膣だけが、ビクビクといやらしい収縮を繰り返して、その都度びゅ、びゅと粘度の高い液体を吐き出していた。

全身が多幸感に包まれる。今までの自慰など総じて見戯だったと確信してしまうほどの快感。

にゆるりとバルガスの指が引き抜かれると、腰から浮かび上がっていた身体がドサリと床に落ちた。

「はっ……へえ……っ♡」

湿った吐息を零しながら、涙がボロボロと流れていた。時折余韻で身体がびくりと震えるものの、絶頂の快感に

骨抜きにされて力が完全に抜けきっている。

（す、すごい、すごい……）

なんてものを味わってしまったんだろう。こんなの、絶対に忘れることなんてできない。もう間違いなく、自慰なんかじゃ満足できない。

「小娘、男に舐られた気分はどうだ？」

「……あ」

視線を向けて、ドキリとする。バルガスが、汚らしい性器を軽く握りながら、私の性器に近づけていたからだ。

「あ、うう……♡」

忘れていたわけではないが、そうだ。まだ私は指で刺激されたに過ぎない。主目的を、まだ互いに果たしていないのだ。

（あ、あ、あんなの、挿れられたらっ……）

張り型よりも歪で、大きなペニス。そんなもので、私

の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられたら。更にそんな状態で、言葉で責められたら。

——絶対に、おかしくなる。

「さて……もう一度聞こう。これが、欲しいか？」

ゾクゾクと背筋が震える。

欲しい。あれで、めちゃくちゃにされたい。

この男に……

(——屈服したいっ……♡)

私は無言で、両足を自ら抱え上げた。

脚がM字となり、いつでも男を受け入れられる無防備な体勢であることが強調される。

「……ふ。まあいいだろう、まだまだ雌犬の自覚は足りないようだが、それはこれから躡けてやるとしようか」

バルガスはニヤリと笑うと、私の濡れそぼった性器に、ペニスをあてがった。



第三話

C H A P T E R 3

敗北



破滅願望

-天才美少女魔術師が自分から犯されに行く話-

(あ、ああ、ああああっ……)

興奮で身震いしそうになる。本当に犯されてしまうんだ、これから。グチョグチョに濡れた私の性器と、バルガスの性器が、くちゅりと音を立ててキスをした。

「ひんっ……♡」

それだけで腰がぴくりと軽く浮いてしまう。三日前、犯されるメイドを見ながら自分を慰めていたときに、どれほど虚しかったか。あのとき私は、ただただ知りたかった。どれほど気持ちが良いければ、そこまで乱れることができるのかと。

そうして今、私は身体にそれを教え込まれた。指でかき混ぜられただけで、狂ったように喘いでしまったのだ。本当に凄かった。そう、たかが前戯で我を忘れるほどに。ならば、あれを——雄の性器を挿れられたら、私は、一体どうなってしまうんだろう。

バルガスと、目があった。ドクンと鼓動が高鳴る。バルガスは見下ろし、私は見上げる。それがどうしようもなく互いの立場を認識させて、

ずにゆうううううううっ……！！♡

「——あ、」

膣壁を搔きわけながら、ずぶずぶと。私の中に、異物が侵入してきた。

「つつひいひいひいひいひいひい！！♡」

ビクン！ と身体を跳ね上げて、視界がぐるんと回る。再び海老反りにさせられて、頭が上を向いたのだ。見えるのは白い壁。脳がじゅくじゅく溶け、性器からはおびただしい電気信号が送られてくる。

私は、かつてないほどの多幸福感を覚えさせられていた。

「ふあ……あああああ……♡」

バルガスの性器が、私の奥の奥まで、埋め尽くした。口がパクパクと開き、視界が涙でボヤける。

「ふむ……締りはいいがすんなりと入ったな。感じているからなのか、それとも既に経験があるのか？」

ぐちゅん！

「あひつ！ あつ、あるわけ、ないでしょつ……！」

「ふ、そうか。ならば貴様は私に処女を捧げたというわけだな」

「ひつ……♡」

ゾクゾクと流れる電気に身を震わせながらも、思う。既に玩具を挿れたことがあるものの、男性経験の有無で処女を定義するのであれば、私は紛うことなき処女だろう。

いや言葉の定義はともかく、私の初体験の相手はこの男だ。それはもう間違いない。そう、汚されたのだ。

（ああ、私、ついに……取り返しのつかないことを、してしまった……♡）

改めて認識した瞬間に、私の被虐心がゾクゾクと刺激

される。なんて、なんて甘美なんだろう。私はなぜか、ある種の感動を覚えていた。

誇り高いはずの私が、汚された。そんな事実にも、言いようのない喜びが胸の内を広がついていく。私自身の、いや、女の弱さを、どうしようもなく理解させられてしまう。

「そら、動くぞ」

ズルズルと、あの歪な性器の、不自然に膨れていた先端が、私の膣壁をガリガリと引つ掻きながらゆつくりと抜かれていく。

律儀に私の身体はビクビクと反応し、喪失感を伴った凄まじい気持ちよさに、私を覆うように両手をついているバルガスの腕を、ギュッと掴んでしまう。

「んはあああああつ♡ あつ、あつ、ああああ……♡」

そして次の瞬間、再び乱暴に一突きされて、

「あひいいいいつ!! お、っんおおおおッ！」

全身から根こそぎ力が奪われる。それほどの暴力的な快感が、私を蹂躪する。身体は抵抗する気なんて全くなく、キュンキュンとバルガスのペニスを切なげに、媚びるように締め付けている。

バルガスの腰の動きが、速くなっていく。

ズパン、ズパン、ズパン！

ずるるるるつ、にゆるつ、にゆるつ、にゆるつ！

「おへええええつ!?♡ だへつ、は、はげしすぎつ、いひつ、おーつ!♡ おーつ!♡ やめてえええつ♡」

理性を吹き飛ばすほどの快楽に、私は泣き叫んで懇願する。実際はやめてほしいなんて欠片も思っていない。無意識に発してしまっている言葉ではあるが、私は理解している。

私がこの男に泣かされていることを、より自覚したいのだ。そして貴方のペニスでどうしようもないくらいに感じていきますと伝えて、自身の被虐心を満たしたいのだ。だから、叫ぶ。

「だめえつ、だめつ、やめへえつ、それ駄目なおおお

っ!♡ 駄目になるつ、私っ、駄目になつちや、あはあんっ、んはあああ——っ!」

もはや身体は何一つ私の意思では動いていない。バルガスの動きに合わせて大きく身体を震わせて、身体中が悲鳴じみた嬌声をあげて、目の前の男に服従を伝えている。

お尻を、おびただしい量の液体がグラグラと伝い続けている。ほぼ全て、私が分泌した愛液だろう。

バルガスはニヤニヤと私を見下ろしながら、ズパンズパンと私の腰を打ち続けている。

(あああああ……ッ!♡ これ、これ、これえ……ずつと、こうされたかったのお……!♡)

最低な男に余裕たっぷり組み伏せられて、見下ろされて、自分勝手に突かれて——なのに、私は情けなく喘いでしまつて。

それが、バルガスの女性を見下す発言を自分の身体で肯定してしまつていよう、堪らなくゾクゾクする。

「ぐひいひいひいっ……♡ おつ、あひやつ、あうっ、あうっ、ひううううんッ!♡」

私は甘えたような、獣じみた嬌声をあげることしかできずにいた。想像を遥かに超えた快感に身体も心も蕩けきって、全てを雄に委ねてしまっている。

ずっと羨ましかった。あの本の主人公が。悔しそうに喘ぐ、メイドが。たつた今、それが叶っている。私は今、プライドをボロボロにされながら、犯されている。

(ああ、あああうう……♡)

涙が溢れた。快感による反射ではなく、感動で。

ああ、なんて気持ちがいいんだろう。

悔しいのが気持ちいい。

バルガスに弄ばれるのが気持ちいい。

無理やり昂ぶらされてしまうのが気持ちいい。

情けないのが気持ちいい。

気持ちいい。気持ちいい。気持ちいい。

それしか言えない。凄まじい多幸福感に満たされている。捕食された虫のように、無様にビクビクと痙攣し続けながら。

ぬりゆん、ぬりゆん、ぬりゆん、ぬりゆん。

びくびく、びくつ。びくん、びくん。

「だめええええ……わたじつ……おつ、おかしくなるうう!!」

異常なほどに脳内麻薬が分泌され続けて、本当に馬鹿になってしまっているのではないかと恐怖するほど頭が痺れている。

身体だけでも泣き叫ぶほどに凄まじい快樂なのに、心までもが陶醉してしまっていた。望んでいたはずなのに、果てがなさすぎて、怖い。

「ふん、随分と気持ちよさそうだな?」

「あぁっ……き……気持ちいいですうっ!!♡」

なのに、私は更に、貪欲により高みを貪ろうとする。どうすればより気持ちよくなれるか学習してしまった私の口から、無意識に服従する言葉が飛び出す。

それを受けたバルガスの笑みで、自身の情けなさを認識することで、

「うぐぐううううッ♡」

狂おしい程の悦びが生まれ、私はどんどん馬鹿になっていく。

ぶしゃっ♡　ぶしゃっ♡

容赦なく突かれながらも、時折その隙間からいやらしい汗を吹き出してしまふ。

ズバンっ、ズバンっ、ズバン!

「がひえっ!　あひゅっ、んおほッ♡!」

気を抜けば意識が飛んでしまいそうな、私の常識を壊

す快楽が全身を暴れまわっている。

女は、男に犯されることでここまでの快感を得ることができるとか。これは、無理だ。//勝てない//

女は男に、勝てない。

能力的なことではないのだ。それだけの話で終わるのであれば、私はほとんどの男よりも優れていると言えるけれど。

身体の根本的な部分ももう、男に服従するようにできている。バルガスは、そういう事を言っているのだ。私の性癖とか、そんなものは誤差にすぎない。どんな女だろうが、ここまでの快感を与えられたら、絶対に心が折れる。いや、心が、媚びる。

ドロドロに溶け切った私の性器が、簡単にバルガスの性器を受け入れていく。ぐちゅっといやらしい音を響かせながら、男の性器は私の身体の深いところを抉り、そして私はその刺激であっけなく泣かされる。

性交とは、粘膜の擦り合いだ。そう言葉にすれば同等であるかのように聞こえるのに、現実を見れば、女は男に泣かされ続ける。

「ひいつ♡ あひつ、あひいいいいんツ♡ はげつ、激しすぎりゅつ、もつと、優しくしてへえつ!!」

ああ、とうとう恋人同士のような事まで口走ってしまった。気持ちが良すぎておかしくなっちゃうから、優しく可愛がってくださいと、私はそう言ったのだ。

「優しくだと？ 貴様のような雌豚に優しくする必要などないわ、そのまま溺れている」

「あぎゅううううツ！♡ じひいつ、ぬツ、しんじやううツ!!」

背筋に走る甘すぎる痺れが、私の根幹をゆっくりと溶かしていく。脳はとつくにオーバーヒートしていて、身体なんてどこを見ても、可愛がってもらえて気持ちがいいですと懸命に訴えている。

こんなの、堪えられるはずがない。もうイク。あつという間に昇ってしまったけど、わかる。物凄い波が来る。

下手をしたら本当に廃人になるかもしれない。そんな馬鹿な心配を真面目にするほど、私を蹂躪するペニスが、

凄すぎる。

（——廃、人？）

ゾツと、背筋が震えた。

大袈裟な想像かもしれないが、しかしありえないことではない。快感が異常すぎて、脳の回路が壊れてしまう可能性が絶対には言い切れない。

狂おしいほどに心と身体は満たされているが、だからといって廃人になることまで受け入れられるわけがない。絶対に嫌だ。

安全を考えるならば、逃げるべきである。

さすがにそこまで簡単に人が狂うことはないとは思いますが、実際にどうなってしまうかなんてわからない。多分大丈夫だろう、でイカされた結果狂っただなんて、全く笑えない。

（で、も——どうやっ、）

殺意を糧に昏倒させる呪いはかけている。意識を失つ

たら転移する魔術も発動済だ。けど、どちらも発動条件は満たしていない。今すぐ満たすこともできない。ひよつとしたらイッた瞬間にその衝撃で気を失う可能性はあるが、いく衝撃で脳が壊されることを心配しているのだから、イッたあとに転移しても意味がない。

では、今から新たに魔術を行使する？

ずちゅつずちゅつずちゅつずちゅつ!!

「あおおおおッ、ひっ、んぎいいいいッ!!」

(む、無理——ぜつたい、むひっ……♡)

ただでさえ、魔力拡散薬を飲まされているのだ。魔力を収縮させにくい状態でも私ならば魔術を行使できるとはいえ、それはあくまで、まともに集中できる状態であればの話だ。こんな、ペニスが容赦なく私の中をほじくり回している中で、魔術を行使するなんてできるはずがない。

力で抵抗する？ 考えるまでもなく不可能だ。つまり私自身では、もうこの場は切り抜けられない。

「お、おっおねがひいっ、とまつ、とまつてえええええええッ!!♡」

私は力を振り絞って、絶叫するように懇願した。瞬間、脳がじゅくんじゅくんと痺れるのを感じ——私は瞬時に失策であることを悟った。

「なんだ、やかましい」

でも。

「いッ……イキそうなんでしゅっ……!♡ 本当に、おかしくなっちゃ、こわ、怖いのおっ! おねが、おねがだから、やめてくださいい……!」

止まらない。結果なんて、わかりきっているのに。

「ふはははははっ! 何かと思えば、知らんな。勝手に狂え。何、安心しろ……そうなたら責任をとって、面倒を見てやるとも。家畜小屋で、奴隷に世話をさせるだけの話だな。くくく」

バルガスはそう嬉しそうに言い放つと、より強く腰を打ち付けてきた。ただ乱暴に突かれているだけなのに、

降参しきつっている私の身体は否応なく快感を送り込まれてしまう。

ずぶぶつ、ずぶん、ずぶつ、じゅばん!!

「おぐうつ♡ やあ、やらあああああッ!♡ だつ、ああつ、あはあああ〜ッ!♡」

昇る。昇っていく。先程私を狂わせたあの指の刺激ですら、やはりあれは前戯でしかなかったのだと、納得させられてしまうほどの高みに。

膣内で暴れまわるペニスに翻弄されながら、乳房がぶるんぶるんと揺れる。パンパンとリズムカルに侵入してくるペニスが、子宮を揺さぶっている。

きゅん、きゅん。精液を搾り取ろうとするかのように、膣が懸命にバルガスのペニスを締め付けていた。

「ひゃひつ、くうつ、んひつ、もっ♡ もう、む、むりっ♡」

「ふん、もう達するののか? 淫乱な女だな」

ゾクゾクゾクゾクつと全身を淫らな電撃が襲い、痺れる。

イク、イク、イク。また、こいつにイカされる。

ずにゆるるるるるつ!

愛液を掻き分けながらペニスが引き抜かれて、すぐさま。

「イっ——」

「その面を見ていてやろう。そら無様に鳴け、小娘」

じゅぶううううううう!!

膣肉を押し広げながら、侵入してくる。

「つつつくうううううううううう!!」

スパークに、神経が灼かれた。

屈服感と多幸福感が混じりあった、圧倒的な絶頂。

「…………ッ! ……ッ!」

深すぎる。

余韻によるものかと勘違いするようなタイミングで小刻みにびく、びくと身体が跳ねるが、その実、私の身体はまだ絶頂し続けている。身体が一定のタイミングでびくりと震える度に、絶頂感が更に上乘せされていく感覚。

「かひゅうううつ——♡」

呼吸ができない。引き絞ったような音が、喉から漏れる。同時に、身体が山なりに反って角度がついたせいとか、私の口からダラーッと涎が伝った。

「……………ッ!!!♡」

ばちん、ばちんと視界が弾ける。虐め抜かれた身体は、歡喜に打ち震えていた。そうしてようやく、深い深い底から戻ってきた身体が、今度は異常なまでに痙攣しはじめる。

ビクン! ビクン! ビクン! ビクン!

「おふつ! つお、お、お、おうッ……!♡」

今度こそ訪れた余韻であったが、それは余韻などと呼べるほど生易しい刺激ではなく、小刻みに爆発しているかのような、一回一回が軽い絶頂を伴っていた。

何から何までが未知の体験である私は、涙と涎を垂れながしながら、ただただ常軌を逸した快感に流されている。性器など、見るまでもなくビショビショのグチャグチャになっっているのがわかった。私が意識できていなかっただけで、もしかしたらずっと愛液を噴き続けていたかもしれない。

そして、ようやく余韻が収まりかけてきたとき、不意に私の膺が、ずどんと抉られた。

「なあっ……!?!」

ずちゅん、ずちゅん、ずちゅんつ。

私を狂わせる動きが、再開した。最初から今まで、一貫していたことではあるが、この男は私の身体のことなどまるで意に介していないようだ。

「まつ、まあっ……!! んひつ、あぐ、あつ、あッ!?」

絶頂したばかりの膣が容赦なく擦られ、降りきった子宮が乱暴に突かれていく。

「牝豚のくせにこんな牛みたいなの乳で恥ずかしいとは思わないのか?」

バルガスは挿入に合わせぶるんぶるんと激しく揺れる下品な乳を鼻で笑うと、今まで自分のペニスへ叩きつけるために

掴んでいた私の腰から手を離し、私の完全に勃起しきつている乳首ごと強引に胸を鷲掴み、挿入を再開した。

「ひゃあああああっ!」

膣から半分ほどペニスが抜かれ、激しく突かれる。乳首はバルガスの分厚く硬い手の平に押しつぶされて、ぐりぐりと刺激されていた。

膣壁がペニスの雁に搔かれる。ぐにゆう、と乳房を取っ手のように引つ張られる。

ぐにゆ、ずちよっ!

ぐりい、ぬぶっ!

ぎゆうう、ぐちやつ!

「あひやああああああああ……ッ! これ、だめ、これだめへえっ……!」

乳首と乳房がいたぶられて、子宮がきゆうんと痺れる。痺れた子宮口を、ペニスの先端が小突き回す。

私の身体は、完全に泣きが入っていた。

(……し、ぬうッ……!)

身体中のいたるところから汁を垂らし、吹き出し、乳首とクリトリスはガチガチに勃起し、逆に生殖器は、トロトロ口に蕩けている。

もつとしてほしいのか、それとも気持ちよすぎてもう許して欲しいのか自分でもわからないが、身体が完全に降参しきつているということだけは間違いない。

(あああ……うそ、イクッ……また、いつちやいそお……!♡)

乳首と子宮という女の弱点を同時に責められ、いとも

あつけなく私は昇りつめていく。まさに、快樂地獄。その終端は、バルガスが射精をするまでだ。

私に終わらせる権利はなく、そしてバルガスが絶頂を迎えないのであれば、私はただ苛められて、過ぎた歓喜に泣かされ続けることしかできない。

ゴリゴリと、お腹の中から突かれて私は弾む。ああ、また――

「いつく♡ いつぐうううッ♡」

先程絶頂を迎えたばかりの身体が、再びバルガスに絶頂させられた。深さこそ先には及ばないものの、指でイカされたとき並みの強い絶頂感に襲われる。

きゆううううううう、つと膣が締まるのと同時に、バルガスの性器も中で痙攣しはじめた。

さすがに、この男もいったのだろうか。

「くく……中々の具合だ。牝豚としても優秀のようだな」

「ぐひっ、ぐっ、ひいん♡」

ビクビクと身体を震わせていると、豚のような鳴き声が、口から勝手に漏れ出てくる。

私とバルガスは、汗だくの身体を密着させながら、息を荒げていた。

「――ふう」

ずりゆううううつとペニスを引き抜かれると、直後にドロリとした感覚が膣口から溢れた。

「あひっ……♡」

（精、液――中に、出されたあ……）

これ以上ない充実感と、極度の疲労が身体を包み込む。はあはあと息を荒げ、滲む天井を眺めていると――

「何を惚けている。まだ終わっていないぞ」

「へえあつ!？」

コルセットのベルトを掴まれると、鞆を持ち上げるよ

うに簡単にぐるんと身体を反転させられた。私は間拔けな声をあげて四つん這いになり、直後。

後ろからずぶううううつと再び性器が挿入された。

「はぐううううううつ!？」

予想していなかった刺激に、ガクンと前のめりに崩れ落ち両肘をついてしまう。

「身体を倒すな。」

そんな言葉と共に、両手が後ろに引つ張られて、ぐいと上半身を無理やり持ち上げられる。その体制のままバルガスはズン、ズパンと、腰を動かし始めた。

「ひはああああ……ッ! き、くうううううん♡」

膝をついた状態で、両手を後ろに引つ張られて犯されている。胸はぶるんぶるんと揺れ、起き上がったせいかわが、今までにも増してだらだらと口から垂れ流れ始めた。

つーつと口からだらしなく糸を引いたまま、私は恍惚

していた。二度もイカされて、それでもまだ挿入されるなんて。完全に、バルガスの玩具に成り果ててしまっている。こんな、性欲の捌け口みたいな扱いを受けて、私は理解した。私を狂わせるこのペニスに、理解させられた。

これが、女であるということなんだ。これに悦びを覚えるように、身体は創られている。

「ふんっ、ふんっ」

余裕綽々と腰を振り続けるバルガス。対する私は、ずつと、ただただ泣き叫び続けている。

「あひいっ! あひいいんッ!♡」

こんなの、反則だ。勝てるわけじゃないじゃないか。

ボロボロと涙を零しながら、溢れ出る多幸福感にやはり抗えない。

(ああ、私——、……)

不意に確信する。私はこんな男にイジめられてどうし

ようもなく悦んでしまう、変態だ。女の本能が男に屈服すること、私もただの雌に過ぎないことを自覚させられて、気が触れそうなくらいに満たされてしまう、そんな変態だ。

「——ッ!!♡」

ガクガクンッ! と大きく揺れ、私は更に絶頂を迎えた。

バルガスは変わらずに、私の性器を責め続けている。ばちゅん、ばちゅんと、粘液が肉棒と絡まりあう音が部屋に響く。

「え——あへっ……♡」

絶頂の極みからゆっくりと降りていったかと思つた刹那、子宮がペニスに叩かれて、そのまま再び絶頂を迎えた。

「ふはははっ……いいぞ、いいぞお……! 私をもっと愉ませろ、卑しく鳴き続けろ!!」

「んひいんッ!♡ あへっ、あへえええ……ッ♡」

叫び続けているせいか、喉がカラカラに乾いている。それでも、掠れた、蕩けきつた雌の嬌声を、必死に身体が絞り出していた。絶頂が、終わらない。ずっとずっと、イキ続けている。

バルガスに手を引つ張られていた状況から、そのまま上半身を起こされて、バルガスにもたれかかっている体制にされた。

ぐちゅんっぐちゅんっぐちゅんっ!

「……っ!♡ ……ッ!♡」

ぼやけた視界が、ガクガクと揺れている。

ほぼ真下から、突き上げられるように何度も、何度も乱暴にペニスが膣内を暴れまわり、快感信号に身体が灼かれ続ける。何度も何度も、何度も何度も絶頂させられて、私の脳が、本当にドロリと溶けたような、そんな気がした。

「しゅ、しゅごひっ……♡ しゅごいいいいッ!」

もう、このまま、私を滅茶苦茶にしてほしい。被虐心がじゅぷじゅぷと刺激されて、私の心が完全に、ポツキリと折られてしまった。もう、何もかもがどうでもいい。気持ちよくしてもらえるのなら、それ以外に何もいらない。

多分私は、女に生まれたのが運の尽きだったのだ。男であつたなら、きつと両親の望み通りに、優秀な魔術師として生涯を終えたのだろう。なに一つの落ち度もなく。

けれど私は、女で。そしてこの味を、女の喜びを、嫌というほど身体に刻み込まれてしまった。きつと、まぐわうという行為そのものが、女をマゾヒズムに目覚めさせるように出来ている。

股を大きく開いて、組み敷かれて、見下ろされて犯されるのか、犬のような恥ずかしい格好をさせられて、後ろから犯されるとか。

そんな、誰がどう見ても絶対的に弱者である立場で、次々と理性を蕩かすほどの快感が送り込まれてくるのだ。こんな状況で、男に逆らおうなんて思えるはずがない。

身体の芯を貫かれると、私の全てが支配されたかのような錯覚を覚える。そんな状態で、何度も何度もイカされる、蕩けて弱りきった心が勘違いしてしまうのだ。

私はこの人のモノだ。この人に滅茶苦茶にされたい。全てを捧げたい。この逞しい殿方の子供を、孕みたい。

きつと、雌とは。

自分を犯してくれる、自分よりも強くて、自分を感じさせられる、つまり雄として優秀な存在に対面したとき。

それだけでその相手に完全に服従する弱い生き物だ。

「くはははは……自分の立場が、理解できたか？ 貴様は、所詮、女なのだッ!!」

「はひいっ♡、はひいい……おぼえまひたっ……男の人には絶対勝てないっ♡、覚えましたあ♡!!」

互いに膝立ちでまぐわわっていた体勢から、どすんと私は前に押し倒されて、再び四つん這いにさせられる。バルガスはそのまま私の背中から覆いかぶさると、左手で



りを作っている。

ガクガクと痙攣する身体の上と下の口から涎が溢れ出る。自分がなぜここにいるのか、この身体は自分の身体なのか、一瞬理解できなくなるくらいに脳がドロドロに溶けている。

「……………ッ!!」

私は瞼を閉じかけながら、身体中の快感を貪りつくしていた。やがて精液の放出を終えると、バルガスはゆつくりと性器を引き抜いた。それだけのことで、ビクンと身体が跳ねてしまう。その完膚なきまでの被食者の立場に、胸が打ち震えた。

「ふう……………小娘の割に中々の具合だったぞ。褒めてやろう」

「はあっ……………!♡ はあっ……………!♡」

全身が疲労感に襲われている。ここまで深く、そして何度もイカされたのだから無理もない。もちろん、その質も量も自慰なんかとは比べ物にならない凄まじさだった。

(ああ……………き、き、きもちよかったああ……………♡)

心も身体も、満たされてしまった。事後に残ったこの倦怠感と、ゾクリと妖しく痺れ続ける感覚が、非常に心地良い。

大きな話だが。私はこの時、初めて――

生きる意味を、見つけたような気がした。

「今後、私の気が向いたときにまた可愛がってやる。わかるな?」

「あ……………ッ♡」

ブルつと身体が震えた。本当は、この後は始末してしまふつもりだったのだが、少しの間こいつに飼われるのも、悪くないかもしれない。

「さて、可愛がることができるかどうかは、リア様次第

ですね」

突如。私とバルガスしかいなかったはずのこの場に、第三者の声が響き渡った。

「何っ——がはっ!？」

糸が切れたかのようにバルガスが崩れ落ちるのを横目に、腰が抜けている身体を懸命に起こすと、そこには――

「お疲れ様です、リア様。お身体は大丈夫ですか？」

セラが立っていた。一瞬、思考が止まる。

「――え」

「後始末は全てしておきました。ゲルウエンの方には、計画が全て成功したと伝わっているはずですので、後の裁定はお任せします」

「セラッ……!?! ど、どうしてここに……あ、ちっ……ちちち、違うの、これはッ……!」

胸と股間を隠しながら、後ずさる。見られた。こんな姿を、見られてしまった。私は慌てて弁明しようとするが、しかし。私は素っ裸で、全身ドロドロのグチャグチャ、おまけにバルガスの下半身は裸。どう見ても事後である。

「……」

いや、こうなったら仕方がない。なぜここにいるかわからないが、もう一度セラの記憶を消そう。

そう思った矢先だった。

「この男の処遇、どうされます？ 殺しますか？ それとも、生かしておいて後で楽しめますか？」

「……へ？ いや、え？」

再び混乱に陥る私。今なんて言った？

「どっ……どういう意味？」

「そのままの意味です。これからも火遊びをなさるおつもりなんですよね？」

背中を嫌な汗が伝った。あれ、ひよつとして全て見透かされてるのではないだろうか。

「ちよつ……ちよつと待って。あの、セラ……ど、どこまでわかつているの？」

「どこまで、ですか……。恐らく全て理解できているとは思いますが、さすがに何かしら見落としはあるかもしれないですね」

全て。全てと言ったか。

「あの……それは、つまり、今回の一連の流れを……理解とかしちやっていたり、するのかしら？」

「それは三日前から今に至るまでのことでしょうか」

ボンツと頭が破裂した。ハッキリとは言われなかったが、しかし三日前という単語は決定的だ。三日前のあの出来事については記憶が消したはずなのだから。これで、両親の下に向かうという命令を無視しただけという可能性も消えた。セラは、初めから全てわかつていたんだ。

「おつ……おかしいじゃない！」

涙がじわああつと溜まり、視界が滲む。子供みたくだったが恥ずかしくすぎてどうにもならない。

「何がでしょう」

「私は絶対に記憶を消したし、その後に催眠だつてかけたの!! 私の魔術が失敗していたなんて言わせないわよ!? 一体なにをしたの!!」

余りの羞恥で語気が強くなってしまう。

「ああ……そういえばその事については少し怒っているんです。私を急に眠らせようとしてきたときは本当に驚きました。リア様が私にそんな酷い真似をされるなんて、思ってもいませんでしたから。最も、真意を確かめようと狸寝入りをしていた私の横で急に“一人遊び”されはじめたときは、余りの衝撃にそんなショックも吹き飛びました」

「ぎゃあああああああッ!?!」

そこから、そこから。つまり、私はあのとき、セラ

が起きている横で堂々と自慰に耽っていたと……：……：そういう？

「おや、そんなはしたない声を出してはいけませんよ」

「貴女のせいよっ!!」

八つ当たり気味に私は叫んだ。叫んだところでこの恥ずかしさは消えなかつたけれど。

「……う、うう、死にたい」

涙声で呟く私。本気ではないが、穴があつたら入りたくくらいに恥ずかしい。私は何でこんな目にあっているんだろう。

「お察しします。でも、リア様が悪いんですよ」

それはもう、完全にその通りだろう。今回私は、私だけの都合でセラを眠らせ、記憶を消して、暗示をかけて、その上でこの城から追い出そうとしたのだから。そこまでの事をされて、それでも私を守ろうと動いてくれた（多分）のだから、感謝こそすれ怒ることなんてできようはずもない。

「うん……ごめんなさい……：……：というかセラって、魔術の心得もあったのね……：……：私の魔術は、全部抵抗していたの？」

私の魔術にそうと悟られずに抵抗できていたのであれば、かなりのレベルの使い手ということになるが、セラならそれくらいできて驚きはしない。いや驚いたけど、妙に納得できる。

「心得はありますが、リア様の魔術に抵抗できるほどではないですね。実は私、魔術が一切効かない体質なんです」

「……は？」

何を言っている？

「いや、だって、これまで何度もセラに魔術を……」

「ですから、効いた『フリ』です。体内に侵入してきた魔力から、どのような効力の魔術なのか解析して、演技をしていました」

「は？……はあ？」

解析はまだいいだろう、一流の魔術師であれば誰でもできる。

けど——魔術が一切効かない体質？

（そんな馬鹿な話が——）

「……いや、ちょっと待って！ 私が魔術を学び始めたばかりの頃、貴女の怪我を治癒魔術で治したことがあったはずよ。あの時魔術によつて傷が癒えたところを私は確かに見たし、そればかりは効いたフリもできないでしょう。魔術が効かない体質というのなら、アレは何？」

「私の体質、ON・OFFが可能なので」

「……」

なんだよそれは。

「……じゃあ何、セラはその体質で私の魔術を全て無効化して、裏で自由に動いていたということ？」

「そうなりますね。ああ、それと事後報告になります」

「ま、まだ何かあるの……？」

「リア様が一昨日開発された、遠視を応用した記録魔術。とても便利そうだったので、使わせて頂きました」

セラの頭上に、映像が映し出される。

『はひいつ、はひいいい……おぼえまひたつ……男の人には絶対勝てないって、覚えましたあッ!!』

大音量で音が響き渡った。一瞬、時が止まる。なんか私に似ている人が、叫んでる。

「……」

嫌な汗が、ぶわつと湧き出てきた。

「どうされました？ ああ、今のところリア様をお守りするためにしか活用していませんのでご安心を。もちろん、この術式はリア様のものなので、使うなど言われれば今後一切使用しません」

「わざと言ってるでしょ!？」

「はて？」

人差し指を頬に当てて、小首を傾げるセラ。いや、無表情でそんな可愛らしい仕草をされても。

『だ、ひてえっ……わたひの中に、せいえきだしてえっ……』

私は瞬時に、形成されている魔術に魔力をぶつけて、映像を霧散させた。未だ魔力拡散薬の影響下にあると思われる身体だが、かつてない速さだった。

「おや、酷いことを」

「どつちがよ!? 今の再生箇所、絶対に悪意があったでしょう!」

「ともかくこの魔術、相手にバレずに遠隔設置が可能で、しかも魔力が許す限り複数設置ができる為、私の仕事が大変やりやすくなります。できればこれからも使用許可を頂けると嬉しいです」

私の糾弾はスルーされた。というかお前はメイドで、仕事は家事だ。

「もう勝手にして……いいわよ、セラならどの術式を使つても……」

「ありがとうございます。非常に助かります」

「……」

「……」

「……あの、セラ」

「はい」

「一生のお願い。私の『秘密』に関する事だけ、記憶を消させて」

「お断りします」

「なんでよッ!？」

間髪入れずに断られてしまった。

「リア様の身を守るためです。リア様が今後一切あいつた真似をなさらないのでしたら構いませんが、とても我慢ができそうな様子ではありませんでしたので」

「うぐつ……」

ぐうの音も出ない。確かに私はもう、自慰なんかで自分の身体を誤魔化すつもりはない。

「……そういえば。今回のことを含めて……その、止めないのね」

「私は基本的にリア様の意思を尊重します。……それに、男の人に虐められたいだなんて可愛らしい望みだと思えますよ、私は。王城内には、それこそ吐き気を催すほどの変態嗜好の方もいらつしやいますし」

「う……」

ハッキリと、私の歪んだ願望を言い当てられて、かあつと顔が熱くなる。

「……尊重してくれるのなら、このことはさっぱりと忘れて——」

「いえ、最優先はリア様の安全ですので。今回の件も、私が守り切れない事態が発生する可能性があるかと判断していたら止めていました。一応問題はないと判断したからこそリア様の自由にして頂いたわけですが、それでも危険な火遊びであることに変わりはないので、これからはもう少し私を頼ってください」

「……いやでも、メイドの貴女にそんなことをさせるわけには——」

「ユピテル様とセレス様からは黙っている様に言われていましたが、私は元々リア様の護衛も仰せつかっています。それに、これからもリア様が今回のようなことを続けられるのであれば、その護衛は必須でしょう」

「あう……あの、でも、それって……私の、その、痴態を……」

「仕事上嫌でも目にすることになるとは思いますが、それくらいは我慢してください。といいますか、既に私にガッツリ見られているわけですから、開き直つてしまえ

「ばいいのでは？」

ガッツリて。いやガッツリ見られたんだらうけど。くそう、そんな簡単に受け入れられることじゃないんだよ。幼少時から一緒だったメイドに赤裸々な部分を見られるって、親に知られる並に恥ずかしいんじゃないけど。

「それに——今回の件、リア様にしては穴だらけでした。バルガスに殺害を封じるための呪いをかけていたようですが、行為の最中にバルガス以外の人間が殺しにきたらどうしていましたか？ もしくはそこまでの直接的な殺害でなくても、同じく行為の最中に無理やりあの媚薬を過剰摂取させられていたら、どうでしょうか。他にもいくらでも方法は思いつきます。身を守らなければいけないリア様が自ら危険に飛び込んでいるのですから、どうしても事前準備だけでは限界があるのです」

「……」

呪いに関しては、範囲展開するよう改善すればそれは防げるかもしれない。けれど、範囲外から魔術や矢で攻撃されたら対応できない。それも含めて、特定の条件に限定させれば大抵のことは魔術でどうにかできるだろうが、起こり得る全ての危機を予測しそれに対応させる魔

術を準備しておくことなど不可能だ。

それを考えるならば、確かにセラのように、何か予想外のことが起こったときでもその場に合わせた対応が可能な人材が控えていることが望ましい。

他人に知られるなんて死んでも御免なのだが、他ならぬセラであればまだ、恥ずかしいで済ませることができて、いや、済ませたくはないが、既に知ってしまったって、しかも記憶を消せないのならばもう済ませるしかない。

「……セラはいいの？ 戦闘行為とかならともかく、私の下らない趣味で無駄な仕事をさせられて。私が言うのもなんだけど、すつごく馬鹿馬鹿しい護衛だと思うんだけど……」

「そうですね。自覚があるのなら、控えて頂けると助かりますが」

「……」

「ごめんなさい、無理です。」

「……頼つてくださいますとは申し上げましたが。例えば頼れなくとも、今回のように勝手に動くだけですの……できれば受け入れて頂けた方が、無駄を省けます」

「それは……そうね、うん」

「納得していただけましたか。では今後、男性と性交なさりたい時は、実行に移す前に私に伝えてください」

「……」

それはハードル高い。できれば勝手に察してくれないだろうか。

「さて、では改めて、この男についてはどうなさいますか？」

セラが、床で気を失っているバルガスをチラリと流し見た。

「あ……こいつは……」

「殺しますか？」

サラつというな。私も元々そのつもりではあつたけど。でも——

「う——ん……ちよつと、勿体ないかも……気持ちよかつたし」

ボソつと、小声で呟くように本音を漏らす私。

「はい？ 申し訳ありません、良く聞こえませんでした。もう一度お願いします」

「……」

絶対聞こえていたよね。もしかして私、これからずっとこうしてセラにからかわれ続けるんだろうか。

……言いようのない気恥ずかしさに、私はハア、と諦めの溜息をついた。



この続きは製品版でお楽しみください